

社会科における思考力・表現力の育成をめざして

- 思考・表現活動を通して，多面的に考察する力をはぐくむ指導の実際 -

社会科の授業では，社会的事象について様々な視点で見たり考えたりすることが重要である。問題解決的な学習の過程において，子どもたちが社会的事象を多面的に考察し，学んだことを次の学習に発展させ，実生活に生かすことができるようにする必要がある。昨年度は，これらの活動を支えるために学習ハンドブックを開発し，第3学年で授業実践を行った。

今年度は，問題解決的な学習過程で多面的に考察する力をはぐくむことについて，とりわけ「調べる」「まとめる」過程に焦点を当てて研究を進めた。授業実践では，それらの過程で，調べたことや考えたことをレポートに書いたり論述したりして，自分の考えを表現し合えるような活動の場を設定した。そして，互いの考えを伝え合い，さらにその考えを集団で練り上げていく学習活動例を提示した。

目 次

はじめに	1	第3章 小学校第5学年の実践を通して	
第1章 社会科学習における 子どもの実態と育成したい力		第1節 「これからの食料生産とわたしたち」	
第1節 社会科学習における子どもの実態		(1) 単元全体を通して	17
(1) 調査結果から見える 思考力・表現力の課題	1	(2) 個を見つめて	24
(2) 学習ハンドブックは有効だったのか	4	第2節 「わたしたちの生活と情報」	
第2節 社会科学習で育てたい力		(1) 単元全体を通して	27
(1) 新学習指導要領の完全実施に向けて	5	(2) 個を見つめて	37
(2) 授業で大切な二つの活動	6	第4章 研究の成果と課題	
第2章 思考力・表現力の育成をめざして		第1節 研究の視点について	
第1節 社会科の学習をより充実させるために		(1) 社会科学習における思考・表現活動	39
(1) 思考・表現活動を繰り返し行うこと	8	(2) 単元構想の工夫がもたらす効果	41
(2) 多面的に考察するとは	11	第2節 多面的に考察する力を育成するために	42
第2節 多面的に考察する力をはぐくむための 方策		おわりに	42
(1) 問題解決的な学習の過程での 単元構想の工夫	12		
(2) 「調べる」「まとめる」過程での 学習活動の工夫	14		

< 研究担当 > 小西 英生 (京都市総合教育センター研究課研究員)

< 研究協力校 > 京都市立六原小学校
京都市立桃山小学校

< 研究協力員 > 柴田 麻也子 (京都市立六原小学校教諭)
高木 律 (京都市立桃山小学校教諭)

はじめに

2006年にベネッセが小学生2,726人を対象に行った「第4回学習基本調査」によると、「社会科が好き」と答えた割合は全体の48%であり、これは9教科中最も低い値であった(1)。筆者の経験則ではあるが、「社会科が嫌い。」と言っていた児童が、その理由に「覚えることが多いから。」「調べるのが難しいから。」と言っていたことを思い出す。

本来、社会科の学習は、社会の中で営まれている人々の生活の中に、今まで知らなかったような深いつながりや様々ななかかわりを発見するなど、見えるものから見えないものを発見することに醍醐味があるといえる。

そのためには、社会科の学習で、社会的なものの見方や考え方を育てることが求められる。つまり、子どもたちが自分で調べたことを基にしながら、社会の中で営んでいる人々の生活についての特色やつながりなどを、様々な視点から考えられるようにすることが重要であると考え。そして、子どもたちが少しでも「なるほど。」「そのような理由があったのか。」といった思いがもてるようにすることが大切である。

しかし、社会科の学習では、単元の終末場面で、調べたことをそのまま書き写したり発表したりする活動をして、単元の学習を終了しているという実態があることが指摘されている。「お調べ発表学習」(2)などといわれているのは、そのような現状を一言で表しているのではないかと思われる。調べたことを発表する活動だけで終わらせず、そこからどのようなことが考えられるか、なぜそうなのかを吟味・検討する活動が大切である。

昨年度は、子どもたちが自分の力で資料を読み取り、自分の考えをもてるようにしたいと考え、その手だての一つとして社会科学習ハンドブックを開発した。そして、それを社会科の学習が始まる小学校第3学年で活用することで、主体的に学習に取り組む姿をめざした。

今年度は、問題解決的な学習過程で多面的に考察する力をはぐくむことについて、とりわけ「調べる」「まとめる」過程に焦点を当てて研究を進めた。授業実践では、それらの過程で、調べたことや考えたことをレポートに書いたり論述したりして、自分の考えを表現し合えるような活動の場を設定した。そして、互いの考えを伝え合い、さらにその考えを集団で練り上げていく学習活動例を提示した。

第1章 社会科学習における 子どもの実態と育成したい力

第1節 社会科学習における子どもの実態

(1) 調査結果から見える思考力・表現力の課題
児童生徒の実態をとらえるために、下の～の調査結果を分析した。とについては、社会科の調査問題ではないが、調査問題が社会科の学習活動と重なる部分が多く、これらの調査結果を分析することで、広い視野から児童生徒の実態をとらえることができるのではないかと考えた。

特定の課題に関する調査(社会)

平成20年度京都市学力定着調査

平成20年度全国学力・学習状況調査(国語)

OECD生徒の学習到達度調査(PISA)

特定の課題に関する調査(社会)

特定の課題に関する調査(社会)は、平成19年に、国立教育政策研究所が、小学校第6学年と中学校第3学年を対象に実施したものである。「社会科における基礎・基本となる知識・概念及び問題解決的な学習過程の実現状況について調査を行う」(3)ことを目的としている。本調査の結果からは、次の課題が挙げられている。

<調査結果における主な課題>(4)(下線は筆者)

【小学校】

・ 課題の解決策を表現したり、その理由を説明したりすることが不十分である。

【中学校】

・ 地形図や資料を読み取り、比較しながら、分かったことをまとめる力が不十分である。[地理的分野]

・ 複数資料から必要な情報を読み取り、総合的に解釈することに課題がある。[歴史的分野]

・ 自分の考えを、根拠をあげて説明する力が不十分である。[公民的分野]

このように、問題解決的な学習の過程において、わかったことをまとめることや自分の考えを説明することなど、自分の思いや考えを表現することに課題があるといえる。そして、指導の改善点として「調べた事実を比較し、関係付け、総合しながら再構成する表現活動を工夫すること」「自分が何を伝えたいのかを言葉や文章で記述する学習を大切にすること」(5)など、考える活動と表現する活動を一体的に行うことにより、言語活動の充実を図るよう求めている。

平成 20 年度京都市学力定着調査

京都市学力定着調査は、平成 21 年 2 月に本市教育委員会が教育研究会と共催して、小学校第 3 学年から第 6 学年までの児童を対象に実施したもので、各教科の学習状況を把握することを目的としている。

『『学力定着調査報告』小学校社会』(6)からは、どの学年においても、前回調査(平成 20 年 2 月実施)より平均通過率が上回っていることがわかった。その一方でいくつかの課題を見出すことができた。表 1-1 は、各学年において、平均通過率が最も低かった問題と、それらの問題にかかわる指導上の留意点を「学力定着調査」報告から抜粋したものである。(7)

表 1-1 平均通過率の低かった問題の内容と指導上の留意点(下線部は思考力・表現力にかかわる部分に筆者が引いたもの)

学年	問題の内容	平均通過率	指導上の留意点
3 年	<思考・判断> 地下鉄の駅がある広い通りに商店が多い理由を <u>考え、記述する</u> 問題	53.2%	発見したことや気付いたことの発表で終わるのではなく、その理由を <u>考えさせる</u> ことを習慣化する。
4 年	<思考・判断> 京都府の地形図と土地利用図を比較して、 <u>相互の関わりが考えられているか</u> を問う問題	66.8%	それぞれの地図からわかることを一つ一つ例挙し、2つの資料を見比べて <u>関係を考えながら</u> 学習を進める。
5 年	<技能・表現> 南西諸島の気候と日本海側の気候の特色を読み取る問題	62.1%	資料を正しく読み取り、読み取ったことを <u>自分の考えの根拠として活用</u> できるようにする。
6 年	<知識・理解> 室町時代の文化の特色を理解しているかを問う問題	62.3%	学習のまとめをする際に、各時代の特色を児童に <u>短いフレーズ</u> で表現させる。

問題の内容からは、資料を読み取り、社会的現象について「なぜ、そのようになっているのか。」という理由や相互のかかわりを考えること、歴史学習では、それぞれの時代の特色を総合的に理解することに課題があるといえる。そして、それらの課題を解決するためには、事実から考えたり、考えたことを表現したりする活動をさらに充実させる必要があることを、指導上の留意点から読み取ることができる。

平成 20 年度全国学力・学習状況調査(国語)

全国学力・学習状況調査は、平成 20 年 4 月に、文部科学省が小学校第 6 学年と中学校第 3 学年を対象に実施したものである。

小学校国語科の調査問題は、A 問題と B 問題の二種類があり、A 問題は主として「知識・技能」に関するもの、B 問題は主として「活用」に関するものである。社会科の調査問題ではないが、これらの問題のいくつかは社会科の学習活動と重なる部分があり、「社会科の学習を進める上で必要とされる能力をみる問題」と、とらえることができる。その問題を図 1-1、図 1-2 に示した。

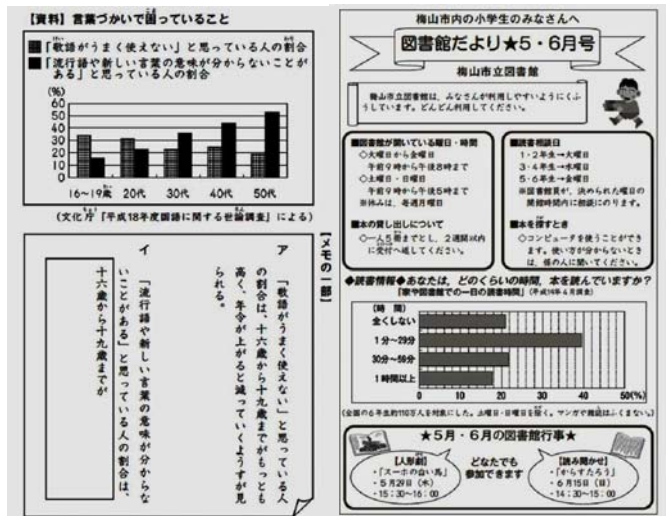


図 1-1 小学校国語 A より 7 分かったことをメモに取る
図 1-2 小学校国語 B より 3 情報を読み取って書く

図 1-1 は「小学校国語 A 7 分かったことをメモに取る」問題である。この問題の出題の趣旨は、「目的や課題に応じて、資料から分かったことをメモに取ることができるかどうかをみる」(8)ことである。また、図 1-2 は「小学校 B 3 情報を読み取って書く」問題である。この問題の出題の趣旨は、「資料から必要な情報を取り出して、自分の考えを明確にしながらかんだり書いたりすることができるかどうかをみる」(9)ことである。出題の趣旨に示されているグラフを読み取る活動や、資料からわかったことをメモに取る活動、さらには、メモの内容から自分の考えを明らかにする活動などは、社会科の学習においても数多く行われる。つまり、これらの活動は、社会科の学習において非常に重要な部分を占めているといえる。

文部科学省はこれらの調査問題の結果から、「目的や課題に応じて、グラフから分かったことや考えたことを書くことに課題がある」(10)とした上で、「資料から分かったことや考えたことを書

いたり、条件に即して書き換えたりする言語活動の充実」(11)を指導改善のポイントに挙げている。

国語科の調査問題にもこのような内容の問題が出題されているということは、社会科の学習だけではなく、各教科にわたって言語活動を充実させることが求められていると考えることができる。また、指導改善のポイントからは、各教科での学習活動の工夫として、調べたことから自分の考えを書く活動やわかったことを短い文でまとめる活動、さらには、キーワードや接続詞などを使ってまとめる活動などの言語活動の充実を図ることが求められているといえる。

OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA)

OECD が実施している生徒の学習到達度調査 (PISA) は、小学生を対象とした社会科の調査問題ではない。しかし、この調査で定義している「読解力」は、社会科の学習で求められている能力と重なる部分が多い。それは、物語や解説などの「連続型テキスト」だけではなく、図やグラフや地図などの「非連続型テキスト」を読み取る能力が求められるからである。そして、「PISA 型読解力は、『読む力 (インプット) - 考える力 (プロセス) - 書く力 (アウトカム)』の三つの力が合わさって成立するものである」(12)と村山が述べているように、読み取るだけではなく、読み取った内容を基にして考えたり表現したりする能力が「読解力」に求められていることも注目したい点である。

読解のプロセスの一つである「熟考・評価」の調査問題には、テキストに書かれていることを、知識や考え方や経験と結びつけることが求められる。既存の知識や経験と結びつけて考えることは、社会科の学習においても求められる能力であり、社会科の学習を充実させる上でも、非常に重要な要素となってくるのである。

この PISA 調査において、2003 年の日本の「読解力」の平均得点が、前回より低下していることを受け、文部科学省は「読解力向上に関する指導資料 PISA 調査 (読解力) の結果分析と改善の方向」を出した。その中で、次のような方向で改善の取組を行う必要があるとしている。

<改善の具体的な方向> (13) (下線は筆者)
テキストを理解・評価しながら読む力を高めること。
テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること。
様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること。

表1-2 問題解決的な学習の過程 (指導計画より)

問題解決的な学習の過程	
出会う	社会的事実や事象と出会い、子どもたちが <u>気付き</u> や <u>思い</u> 、 <u>驚き</u> や <u>疑問</u> をもつ。
つかむ	自分が追究する学習問題をつくり、 <u>予想</u> や <u>調べる計画</u> を立てる。
調べる	学習問題を解決するための資料を集めたり、 <u>見学</u> や <u>調査</u> などの活動を行ったりする。
まとめる	調べたことを基にして <u>考え</u> たり、学習問題に対する自分なりの <u>答え</u> を導き出したりする。

表1-3 読解力向上のための授業づくりのポイント

授業づくりのポイント	
読む	諸感覚に基づく <u>気付き</u> 、 <u>既存の経験</u> や <u>知識</u> を大切にする。
書く	<u>予想</u> と <u>学習計画</u> に時間をかける。
	<u>記録</u> と <u>話し合い</u> を十分にさせる。
考える	結果から <u>結論</u> の出し方を指導する。
	<u>見直し</u> と <u>振り返り</u> とやり直しを習慣化する。

ここで、社会科の学習活動について見る。表1-2は、小学校指導計画 (社会科) (14) に位置づけられている問題解決的な学習の過程をまとめたものである。小学校指導計画 (社会科) では、各学年において概ね、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」という過程で単元が構成されている。これを基本的な形として、それぞれの過程での活動を見ると、「気付き - 疑問 - 予想 - 計画 - 資料収集・見学・調査 - 考える - 答え」という一連のサイクルとしてとらえることができる。

村山は、読解力を向上させるために「読解力向上のための授業づくりのポイント」(15)を示している。表1-3は、それを表にしたものであるが、「読む」「書く」「考える」のそれぞれの活動を関連させて指導することが大切であるということがわかる。また、「読む」「書く」「考える」それぞれの活動での授業づくりのポイントを見ると、「気付き - 予想 - 計画 - 記録 - 話し合い - 結論 - 振り返り」というように、一連のサイクルとしてとらえることができるのである。

社会科の学習を充実させるためにも、PISA 型の読解力を向上させるためにも、学習の流れを大切にして指導することが重要であるということ、共通してとらえることができる。その中でも特に、子どもたちが調べたことから、話し合ったり考えたりしながら自分なりの結論を導き出す活動が重要である。そして、その自分の考えや結論を振り返ることで、新たな気づきや疑問が生まれ、次の学習につなげることができると思う。

(2) 学習ハンドブックは有効だったのか

本項では、昨年度の成果と課題から、社会科学学習における子どもの実態をとらえる。

昨年度の研究では、どのようにすれば子どもたちが自分の思いや考えをもって主体的に学習を進めることができるかということに焦点を当てて研究を進めた⁽¹⁶⁾。自分の思いや考えをもち主体的に学習を進めるためには、資料を読み取る能力を育成すること、言語活動を充実させること、問題解決的な学習を充実させることの3点が重要であると考え、そのための手だての一つとして社会科学学習ハンドブックを開発した。そして、地図、グラフ、写真などの各種資料を読み取るための視点や、調べ方やまとめ方の具体例を社会科学学習ハンドブックに提示し、その中から子どもたちが自分で方法を選んで主体的に追究活動ができるようにした。

学習ハンドブックは、以下のような内容で構成した。そして、小学校第3学年でそれを活用した授業実践を行った。

学習ハンドブックの構成

【「出会う」過程】

様々な資料から、子どもたちが多くの気づきや思いをもてるようにするために、「資料を読み取る視点」を学習ハンドブックに提示した。そして、その視点を基にして資料を読み取る活動を行った。

【「つかむ」過程】

資料から読み取ったことを基にして、子どもたちが学習問題をつくり、予想や追究活動の見通しをもてるようにしたいと考えた。そのために、「学習問題の文型」を学習ハンドブックに提示し、資料を読み取ることによってもった思いや気づき、疑問などを基にして自分の学習問題をつくれるようにした。

【「調べる」過程】

子どもたちが学習問題を解決するための資料を収集し、見学や調査などの活動ができるようにしたいと考えた。そのために、複数の「調べ方の具体例」を学習ハンドブックに提示し、その中から選択して追究活動ができるようにした。具体例には調べ方の手順を詳しく示し、調べ方がわからない児童には、それを参考にしながら追究活動ができるようにした。

【「まとめる」過程】

「まとめる」過程では、子どもたちが調べたことや考えたことをかきまとめられるようにしたいと考えた。そのために、まとめ方の手順を示した「まとめ方の具体例」を学習ハンドブックに提示し、その中から方法を選んで、選んだ具体例を参考にしながらかきまとめることができるようにした。

学習ハンドブックを活用することで、次のような成果が見られた。

まず、資料から多くの情報を取り出せたことである。子どもたちは、できるだけ多くの情報を取り出そうと資料を隅々まで見ていた。自分で情報を取り出せる児童はさらに多くの情報を、全く取り出せない児童は一つでもというように、視点に沿って読み取ることで、自分が読み取った量が増えていくことを実感していた。

次に、子どもたちが学習を進める中で、困ったときに振り返ることができたことである。自らの問題を追究する問題解決的な学習では、すぐに自分の問題が解決できるとは限らず、たとえ解決できたとしても、いくつかの方法で多面的に事実を見つめることが求められる。その追究の過程で立ち止まったときには、学習ハンドブックを見て、もう一度学習の進め方を振り返ったり、他の方法を選んだりしながら、学習を進めることができた。このようなことから、学習ハンドブックが、自ら問題を追究するための「学習の手引き」として有効であったと考える。

その一方で次のような課題が残った。

一つめは、子どもたちが資料から取り出した情報は、単独のものが多く見られたことである。「資料を読み取る視点」には、取り出した情報を自分の経験や体験とつなげたり、友だちの考えとつなげたりして読み取る段階を示しているが、それだけでは不十分であった。取り出した情報を目に見える形にして、一つ一つを比べたりつなげたりして考えることや、自分の考えを深めたり広げたりするために、友だちの考えを聞き合う場を設定することなどの支援が必要であった。

二つめは、学習ハンドブックには、「何を」「どのように書けばよいか」ということを具体的に示したが、「まとめる」過程においては、事実を多く書いたり自分の考えを長く書いたりする児童の姿が見られたことである。学習問題を解決するために必要となるキーワードを自分で探して、それを使いながら短く書きまとめられるようにすることや、字数を制限したりキャッチフレーズにしたりするなど、活動の工夫が必要であった。

このように、諸調査の結果や昨年度の研究から社会科学学習における子どもの実態をさぐった。総じていえることは、調べたことを基にしながら多面的に考えることや、自分の考えを書いたりまとめたりすることに課題があるということである。次節では、これらの課題を踏まえ、社会科の学習で、さらにどのような力を育成することが求められているかについて述べる。

第2節 社会科学習で育てたい力

(1) 新学習指導要領の完全実施に向けて

文部科学省は、平成20年3月28日に新しい小学校学習指導要領（以下、新学習指導要領）を公示した。社会情勢の変化や、児童生徒の国際調査の結果から、思考力・判断力・表現力に課題があったことなどが改訂の背景にある。新学習指導要領では、どのようなことを大切にして学習を進め、どのような力を社会科学習で育てなければならないのだろうか。新学習指導要領の解説社会編の目標と内容から読み解いていく。

まず、目標については第3学年から第6学年まで大きな変更はないが、各学年の能力に関する目標については、「これまでの『調べたこと』に『考えたこと』を加え、『考えたことを表現する』ことを一層重視」(17)しており、考えたことを表現する力を育てようとしている。

新学習指導要領では、言語活動の充実が挙げられている。言語活動のとらえ方は様々であるが、社会科の言語活動がどのような活動を指すのかを学習指導要領解説社会編から見るができる。

観察・調査や資料活用を通して必要な情報を入手し、的確に記録する学習、それらを比較・関連付け・総合しながら再構成する学習、考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことによりお互いの考えを深めていく学習など言語活動の充実をはかること(18)(下線は筆者)

下線部からは、観察・調査や資料などを活用して調べたり、調べたことをそのまま書き写してまとめたりするだけでなく、調べたことを言語にして表し、自分のフィルターを通して自分なりの解釈を加え、それをみんなで伝え合うことにより、さらに自分の考えが深められるような活動が求められているのがわかる。つまり、「調べる」活動だけではなく、そこから先の「まとめる」活動を充実させる必要があると考える。

このことについて、北は、「『調べる社会科』の授業が多く実践されるようになってきた」(19)としながらも、「多くの実践が、調べること、体験することで終わっている」(20)ということを問題点として指摘した上で、「子どもたちに社会科の授業でどのような知識や力を身につけるという観点から、授業改善の方向を考えることが大切である」(21)と述べている。

この点において、新学習指導要領で挙げられている言語活動は、これからの授業改善の視点に大き

な示唆を与えるのではないだろうか。すなわち指導者が、一時間、あるいは単元を通して、子どもたちにどのような内容を考えさせ、どのような内容を理解させるのかを明確にもち、前述した「言語活動」を充実させることにより、学習指導要領の各学年の目標を達成できるようにすることが重要であると考え。それが、社会科の学習を充実させることにつながり、子どもたちの思考力・表現力を育成することにつながると考える。

次に、小学校社会科の内容については、社会情勢の変化に伴い若干の変更があった。したがって、新学習指導要領では、内容の一部が改善され、新たな内容が加えられた。安野は、「現行の指導計画をベースにして、その見直し・改善に努めることが大切である」(22)とし、以下のような点に留意する必要があると述べている。

- ・ 身近な地域や市（区、町、村）の様子学習において、「古くから残る建造物」が加えられ、「方位や主な地図記号」を扱うことが明示されたこと。
 - ・ 地域の生産や販売の学習では、その両方を学習すること。その際、「農家、工場など」から一つを選択し、「商店」は必ず取り上げること。
 - ・ 地域の人々の健康な生活や良好な生活環境、安全な生活に関する学習の中で、「法やきまり」を扱うこと。
 - ・ 食料生産や工業生産に従事している人々の工夫や努力に関する学習の中で、「価格や費用」を扱うこと。
 - ・ 歴史学習において、「狩猟・採集」が新たに加えられたことや国宝などの文化遺産が例示されたこと。
 - ・ 我が国の政治の働きに関する学習の中で、「国会と内閣と裁判所の三権の相互の関連」「国民の司法参加」を扱うこと。
- (23)

例えば、「販売」については、販売者側の工夫を消費者側の工夫と関連づけて扱うこと、我が国の情報産業などの様子と国民生活との関連に関する内容については、これまでの「これらの産業に従事している人々の工夫や努力」から「情報化した社会の様子と生活とのかかわり」になるなど、社会においての一つ一つの事実を双方向にとらえることや、事実がそれぞれにつながっていることなどをとらえさせようとしている意図がわかる。つまり、社会的事実・事象を違う角度や立場から見ることや、広い視野でとらえる力を社会科学習で育てることが求められているといえる。

このように、これからの社会科学習では、思考力・表現力を育成することや、広い視野で考えられる能力を育成することが求められている。次項では、それらに焦点を当てた先行研究をさぐり、授業改善の視点を明らかにする。

(2) 授業で大切な二つの活動

社会科の学習で、思考力・表現力や広い視野で考えられる能力を育成するためには、次の二つの活動を充実させる必要がある。

思考活動

観察・調査や資料などを活用して調べただけでは、調べる技能は育成できるが、社会科の学習で大切な“社会的事象の意味を考える”力を育成することは不十分である。要は、学習問題に沿って調べたことから、“どのようなことがいえるか”を、自分なりに考える活動が保障されなければならないのである。

例えば、子どもたちが、我が国の国土の自然や人々の暮らしについて自分で調べたことから、「人々の暮らしは、それぞれの土地の環境と深い関係がある。」といったことを自分なりに考えることができれば、その単元においての目標が達成できたといえるのではないだろうか。

そのためには、調べたことを視覚化することが必要であると考え。調べたことを文字や図に表して見える形にし、それを操作しながら分類したり、つながりを見出したりしながら考えることが大切なのである。このことは、以下の先行研究の成果からも読み取ることができ、思考活動を充実させる手だてとして注目すべき点である。

和田は、社会的な思考力を高めるために、思考過程を図解化する思考ツール(キーワード化、図解シート)の活用を授業に取り入れた。その結果、「キーワード化により、疑問点を明らかにすることができ、学習課題の設定に役立てることができた」「図解シートを使用したことにより、事象にかかわる概念の整理や思考過程の表出がうながされ、事実と事実の関連性を明らかにしたり、新たな見方や考え方に気付いたりすることができた」(24)と報告している。

また、山下は、思考における言語の果たす役割に注目し、資料から読み取った情報や学習した内容を書き出す形で視覚化し、それらを比較したり関連づけを行ったりするなど、資料を言語化する活動を授業に取り入れ実践を行っている。その結果、「多様な概念的知識の生産・獲得につながった」「社会的事象を総合的に概観することにつながった」(25)と報告している。

さらに、寺嶋は、問題解決的な学習を通して児童の思考力を育成し、社会的な見方や考え方を高める授業の在り方を検証した。実際には、思考の連続性を意識した問題解決的な学習過程を工夫

し、そこに児童の思考を連続させる発問を行い、思考技能を視覚化した学習シートを用いた授業実践を行った。その結果、「三段階の過程に応じた発問をすることで、断片的になりがちな児童の思考をつなげることができた」「思考技能を構造化し、学習シートにおいて視覚化させることで、思考技能の活用が図られた」(26)と報告している。

このように、視覚化して考える活動を充実させることは、思考力を育成する上で効果的であると考えられる。社会科の学習では、社会的事象に出会って問題をもったり、その問題に沿って調べたりする活動はもちろんのこと、その後の調べた事実を基にして考える活動を充実させることが大切であると考え。そのことが、社会科学習を充実させることにつながり、ひいては思考力を育成することにつながるのである。

表現活動

考えたことを自分の中だけにとどめていると、自分の考えにとらわれたり、限られた視野でしか物事を考えられなかったりする。しかし、自分の考えを表現したり人に伝えたりすれば、互いの考えを知ることができ、自分の考えがどうであったかを客観的に認識することができると考える。自分の考えを伝え合い、友だちの考えと自分の考えを比較し、もう一度自分の考えを見直すことで、広い視野をもつことができるのである。

眞崎は、「他者との意見交流をする場面で、互いの考えが見える手立てをとることにより、他者と自分の考えを比較させたり検討させたりすれば、より広い視野で物事をとらえるようになり、多面的に思考する力が育つであろう」(27)という仮説を立て、研究を進めた。授業実践では、イメージマップを作成したり、話し合いボードを使って意見交流を行ったりした。その結果、「少人数でグループカードを操作させながら意見交流を行わせることで、それまでに考えなかった意見に気付かせたり違う意見を聞かせたりすることができ、自分の考えを再構成させるのに役に立った」(28)と報告している。

福岡市教育センター社会科研究室では、「再構成する」とは、「調べたこと、考えたことを図に表したり、言語に表したりすること」であると考え、社会科の問題解決学習における“さぐる”段階で「図に整理する活動」を取り入れたたり、“まとめる”段階で「自分の考えを図に表す活動」を取り入れたたりした。その結果、「事実が視点ごとに整理され、児童の事実認識を確かにすることができ

た」「一部の事実からのみ考えを作っていた児童も全体的にとらえた事実から自分の考えを見直すようになった」(29)と報告している。

このように、自分の考えを図に表現したり、カードを操作しながら自分の考えを表現したりすることは、自分の見方や考え方を広げるために有効な手だての一つであるといえる。

山下も、これまでの授業実践を通して「社会的な事象を多面的・多角的にとらえ、自分の言葉で相手に伝わるように表すことが大切である」(30)と述べている。言い換えれば、「自分の言葉で相手に伝わるように表すことで、社会的な事象を多面的・多角的にとらえることができる。」のではないだろうか。このように、広い視野で多面的に考察するためには、表現活動は欠かせないものなのである。

これらの二つの活動を、問題解決的な学習の過程において位置づけることが、社会科学習の充実につながり、子どもの思考力や表現力を高めることができるのである。

第2章では、これらのことを踏まえ、社会科の学習で思考活動や表現活動をどのように充実させていくのか、その具体的な方法について述べる。

- (1) ベネッセ教育研究開発センター『第4回学習基本調査国内調査・速報版』2006.12 p.4
- (2) 藤井千春『問題解決学習のストラテジー』明治図書 1996.3 p.20
- (3) 国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査(社会)調査結果』2008.6 p.5
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_shakai/06002020000004000.pdf 2009.4.6
- (4) 国立教育政策研究所『特定の課題に関する調査(社会)結果のポイント』2008.6 p.4
http://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_shakai/06002020000007001.pdf 2009.4.6
- (5) 前掲(3) p.66
- (6) 京都市教育委員会『「学力定着調査」報告-小学校社会-』2009.6 p.7
- (7) 前掲(6) pp.13~38
- (8) 文部科学省『平成20年度全国学力・学習状況調査【小学校】調査結果の概要 調査問題の解説と解答類型』2008.10 p.156
http://www.nier.go.jp/08chousakekka/08shou_data/shiryou/04_shou_bunseki_kokugo.pdf 2009.5.11
- (9) 前掲(8) p.169
- (10) 文部科学省『平成20年度全国学力・学習状況調査【小学校】調査結果の概要 教科に関する調査の結果』2008.10 p.6
http://www.nier.go.jp/08chousakekka/08shou_data/shiryou/02_shou_kyouka_chousakekka.pdf 2009.5.11

- (11) 前掲(10) p.7
- (12) 井上一郎他著『読解力向上をめざした授業づくり-国語・社会・理科・生活からの発信-高学年』2006.8 p.12
- (13) 文部科学省『「読解力」の向上に関する指導資料』2005.12
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/gakuryoku/siryu/05122201/005.htm 2009.5.13
- (14) 京都市教育委員会『京都市立小学校教育課程 指導計画社会科』2005.4 3・4-社-4
- (15) 前掲(12) pp.12~14
- (16) 拙稿「社会科における、資料を読み取り、自分の考えをもつための指導の工夫-社会科学習ハンドブックを活用した実践例-」『平成20年度研究紀要』京都市総合教育センター 2009.3 pp.35~68
- (17) 文部科学省『小学校学習指導要領解説社会編』東洋館出版社 2008.8 p.6
- (18) 前掲(17) p.5
- (19) 北俊夫『社会科の責任』東洋館出版社 2000.2 p.47
- (20) 前掲(19) p.47
- (21) 前掲(19) p.47
- (22) 安野功「新指導要領・具体化への工程表 ポイント解説」『社会科教育』明治図書 2008.7 p.14
- (23) 前掲(17) pp.14~15
- (24) 和田繁幸「小学校社会科における社会的な思考力を高める指導に関する研究」『平成20年度(第52回)岩手県教育研究発表会発表資料』岩手県立総合教育センター 2009.1 p.20
http://www1.iwate-ed.jp/kenkyu/siryu/h20/h20_02b3-1.pdf 2009.5.22
- (25) 山下博典「資料を読み解き、自ら考えを深める子どもの育成をめざして」『平成18年度研究紀要』京都市総合教育センター 2007.3 p.30
- (26) 寺嶋正和「思考力をはぐくみ、社会的な見方・考え方を高める小学校社会科学習過程の工夫」『平成20年度熊本県立教育センター派遣国内留学生研究概要』2009.3 p.4
<http://www.higo.ed.jp/edu-c/kokuryu/h20pdf/03.pdf> 2009.5.22
- (27) 眞崎靖「社会的な思考力を育成するために、意見を交流することを通して、考えを吟味することを取り入れた、社会科学習の在り方を探る」『佐賀県教育センター平成20年度長期研修報告』2009.3 pp.1~2
http://www.saga-ed.jp/chouken/chouken_report/h20/pdf/07masaki.pdf 2009.5.25
- (28) 前掲(26) p.8
- (29) 福岡市教育センター社会科研究室「事実を丹念に調べ考えを確かにする社会科学習指導法の研究」『平成20年度研究紀要(第792号)』福岡市教育センター 2009.3
- (30) 山下真一「社会科で育てる表現力とは?」『教育研究』初等教育研究会 2008.8 p.25

第2章 思考力・表現力の育成をめざして

第1節 社会科の学習をより充実させるために

(1) 思考・表現活動を繰り返し行うこと

近年の諸調査の結果や先行研究から、思考活動や表現活動を充実させることが重要であることがわかった。

しかし、社会科の学習において、思考力や表現力を育成することや、広い視野で考えられる能力を育成するためには、これらの二つの活動を充実させることはもちろんのこと、思考 表現 思考 表現というように、思考活動と表現活動を、連動させながら繰り返し行うことが必要であると考ええる。その理由を、思考活動と表現活動の特質から述べる。

思考活動

私たちは普段、考える際には言葉を使って考えている。例えば、「今日は何を食べようか。」ということを考える際には、「昨日は を食べたから、今日は違うものを食べよう。」「前に作った がおいしかったからそれを食べよう。」など、音声として発することをしなくても、頭の中で言葉にして考えている。そのように考えると、表出された言葉が「考えている事柄」の一つとしてとらえることができるだろう。

このことについて、ピアジェは、「子どもにとって言葉は、伝達と表象の道具であるだけでなく、思考の対象である」(31)と述べている。また、ヴィゴツキーは、「ことばの意味はすべて、思考の産物および過程として生ずる」(32)と述べている。さらに、シャルダコフは、「思考は、言語的形式をとっておこなわれ、(中略)言語活動は逆にまた、思考によって形成されるのである」(33)と述べている。

つまり、私たちは、言葉を使って思考しているのとらえることができ、思考と言語の間には密接な関係があるといえる。

また、“思考”を心理学的な側面からさぐると、思考とはどのような活動なのかを見つけ出すことができる。

ピアジェは、思考の起源を活動に求め、「子どもが環境に対して能動的に立ち向かうとき、いくつかの活動が組み合わさり、(中略)適応的な仕方ではたらくようになる。ここで形成されるいわば

活動倫理ともいうべきものが思考のはじまりである」(34)と述べている。

また、松元は「思考とは、生きるための営みであり、環境に適応することや環境を意図的に変えようとすることを含んでおり、生きることそのものである」(35)と述べている。

さらに、斎賀は「思考は、(中略)何か新しい場面で、今までの行動の仕方では適応しにくい場合に、その場面に適応するために行われる複雑な知的精神活動をさしている」(36)と述べている。

以上のことから、思考とは、今までになかった新しい環境や何らかの問題に直面したときに、それらに適応しようとするために行われる精神活動であるのとらえることができる。そして、思考することによって、人がよりよい方向に向かったり、成長したりすることができると考えられる。

杉山も、「『考える』とは、単にあれこれの思いをめぐらせることではなく、ある課題の解決をめざして、また、よりよいもの、より美しいものをめざしての努力に裏打ちされているものでなければならぬ」(37)と述べていることは、思考することが、よりよい価値を生み出すことができるという意義を言い表している、とらえることができる。

このように、授業で思考活動を大切にすることは、新しい価値を子どもたちが獲得していくことに役立ち、子どもたちの人間形成にも役立つものになると考えることができる。

表現活動

人間が言葉を使って思考しているということは先にも述べた。頭の中で思考しているときや、一人でつぶやきながら思考しているときなど、ヴィゴツキーの理論を援用するならば、それは「内言」の段階である。それを人にわかるように伝えるためには、その「内言」を組み立て直す必要がある。事柄の順序はどうか、つながりのある文になっているかなどを考えながら、話したり書いたりすることが求められるのである。

これについて鵜養は、「他の人に理解されるように伝えるのは、なかなか難しいことである。断片的な言葉や、内的な呟きを整理し、並べなおし、つながりを考え、(中略)まとめていく作業が必要」(38)と述べている。つまり、自分で言葉を組み立て直して表現することで、はじめて人にわかるように伝えることができるのである。このように、自分の考えを表現する際にも、私たちは言葉を使

っているのである。

さて、普段の生活を振り返ってみると、言葉を使って表現することで、自分の考えがはっきりすることがあることに気づく。

例えば、自分が思っていることや考えていることを「だれかに聞いてもらいたい。」と思ったことはないだろうか。自分の考えが正しいのか誤っているのかわからないとき、たとえ適切な助言がなかったとしても、自分の思っていることや考えていることを話すと、安心したり納得したりすることがあるだろう。考えたことを自分の中だけにとどめていると、「自分の考えはどうなのか。」ということがわからなくなったり、限られた視野でしか物事を考えられなかったりする。

しかし、自分の考えを表現したり人に伝えたりすれば、相手の反応や受け応えなどから、自分の考えのよさや誤りに気づくことができるのではないだろうか。「どのようなことが自分の考えに足りなかったのか。」と反省したり、「自分の考えが理解された。」と自信をもったりすることができる。つまり、表現することで、自分の考えを客観的に認識することができるのである。言葉を使って表現することは、自分の考えを振り返る上でも、大きな意義があるといえる。

このように、思考活動と表現活動は、いずれも言語を介して行われていることがわかる。そして、表出された言葉が思考の過程や事柄の一つであると考えられていることから、思考と表現の二つの活動の間には密接な関係があると考えることができる。

そして、社会科において思考力や表現力を育成することについて、加藤は、「表現とは、それが作り出されるための一連の思考過程（創造的な問題解決過程）の結果であるため、表現することによって理解が促進され、思考力・判断力の育成につながる」（39）と述べている。また、有田も「表現力の育成に重点を置くと思考力・判断力も育つ」（40）と述べていることから、表現力と思考力には深いかわりがあるといえる。

つまり、思考力や表現力を育成するためには、言葉を用いて考えたり表現したりすることが大切であり、その言語活動を充実させるためにも、社会科の問題解決的な学習の過程において、調べた事実を基にして考え、考えたことを互いに表現し合い、そしてまた考え、表現し合うというように、思考活動と表現活動を繰り返し行うことが必要であると考えられる。

前述の新学習指導要領に示されている“考えたことを自分の言葉でまとめ伝え合うことにより、お互いの考えを深めていくなどの言語活動”の充実には、まさに思考活動と表現活動を繰り返すことによって図ることができる。

そして、思考活動と表現活動を繰り返し行うことによって、次の三つのような効果が期待できると考える。

一点目は、問題解決能力を育成することにつながることである。

人間が新しい環境や何らかの問題に直面したときに、それらに適応しようとするために考え、考えることによってよりよい方向に向かったり、成長したりすることができるものであるということは先にも述べた。このことは、社会科という教科の本質と共通する点が多いと考える。

それは、社会科が問題解決的な学習を大切にしているからである。社会科における問題解決的な学習は、子どもたちが社会的事象と出会い、「なぜだろう。」「どうしてだろう。」「もっとくわしく調べてみたい。」という思いをもって、自分なりに調べたり考えたり表現したりしながら、問題を解決していく学習である。

大森が、「問題解決学習は、（中略）思考力を科学的、能率的に形成する学習指導法の一つとして探求されてきた」（41）と述べているように、問題解決的な学習の過程においては、「なぜ」「どのように」など、必ず子どもなりの思考の過程が存在する。「なぜだろう。」「どうしてだろう。」という思いをもったそのときが、まさに新しい環境や場面に直面したときであると考えられる。そして、その環境や場面に適応するために、自分なりに考え、表現し、また考えることで、問題を解決していくことができるのである。

さらに、子ども自らが問題を解決していくことで、「なるほど。」「そのような理由があったのか。」などの思いをもつことができ、その思いが「次について調べてみよう。」「についても同じことがいえるだろうか。」といった次の学習への意欲につながっていくのである。このようなことから、思考活動と表現活動を繰り返し行うことは、問題解決能力を育成することにつながる。

二点目は、知識の定着につながることである。

例えば、「野菜や魚などの価格は時期や場所によって変わる。」ということを知り、言葉だけで知識として理解するのと、実際に価格が異なる同じ種類の野菜を見て、「なぜ、値段が違うのだろう。」と

という思いをもって、自分で調べたり考えたりしながら理解するのでは、その知識の定着の仕方に大きな差が出てくるのではないかと考える。

子どもたちが自分なりに考え、考えたことを伝え合ってお互いの考えを深めることができたならば、再び値段の違う同じ野菜を見ても、「もしかして、時期や場所が関係しているのではないか。」と考えることができるのである。

伊藤は「新しい知識・概念を習得したというとき、単にそれらを記憶できたというのでは不十分であり、それらを必要とするときに適切に活用できるように既存の知識体系の中に組み込まれるようにする」(42)ことが必要であると述べている。また、山田は、「知識を一つ獲得するということは、実は考えるということを除いては成り立たない」(43)と述べている。このことから、知識を得るためには思考することが必要であるといえる。

そして、その知識を自分の言葉で表現することによって理解が深まり、確実に定着するのではないかと考える。それは、「どのような言葉ならみんなにわかってもらえるのか。」「このように考えた理由は～である。」「この事実からいえることは～である。」などというように、“相手にわかるように”“根拠や解釈を示しながら”得た知識を活用しながら表現したり説明したりすることは、子どもたち自身が、学習した内容を見直す機会になるからである。人にわかるように自分の言葉で表現することで、社会で一般化できるような法則や概念、社会科で習得すべき内容などをさらに深く理解することができるのである。

つまり、知識を確実に定着させるためには、自分の考えや得た知識を再構成する活動が必要であり、思考することによって得た知識は、表現することによってより確かに定着するのである。このような活動を通して得られた知識は、新たな環境や場面においても十分活用が可能であると考えられる。

三点目は、視野を広げて考えることにつながることである。

自分の考えを表現し合うことで、自分とは違った多様な考え方に会うことができると考える。友だちの考えを聞くことで、「そのような考え方もあるのか。」と新しい考えに会い、視野を広げることができるのである。

三宮は認知心理学の立場から、「自分の考えと他者の考えは異なる場合があることも理解させたい」(44)とした上で、「自分の中で閉じた思考にならないように、学校や家庭で一つのテーマについ

て互いに話し合うことが習慣となっていることが望ましい」(45)と述べている。つまり、自分だけの考えにとらわれないようにするためには、自分の考えを表現したり話し合ったりすることが重要なのである。

また、新学習指導要領の解説社会編には「小学校社会科は、地域社会や我が国における人々の社会生活を広い視野からとらえ総合的に理解することを通して、公民的資質の基礎を養うことを究極的なねらいとしている」(46)と記されている。

このことは、社会科の学習を通して、広い視野から物事を考える力を育成することが求められていることを指している。子どもたちが広い視野から物事を考えることができるようにするためには、自分の考えを表現し合い、友だちの考えと自分の考えを比較し、もう一度自分の考えを見直すことができるような活動を学習場面で設定することが必要なのである。その活動を繰り返し行うことで、社会的現象に出会ったときに、広い視野で見たり考えたりすることができるのである。

思考活動と表現活動を繰り返し行うことは、まさにその活動を保障することにつながるのではないだろうか。自分の考えを表現し合うことで自分の考えを見直し、さらに、友だちの考えのよさを取り入れて、もう一度自分で考えることで、考えを深めたり広げたりすることができるのである。

図2-1にも示しているように、思考活動と表現活動を繰り返し行うことは、視野を広げて考えることにつながり、公民的資質の基礎の一つである“多面的に考察する力”も育成することができるのである。

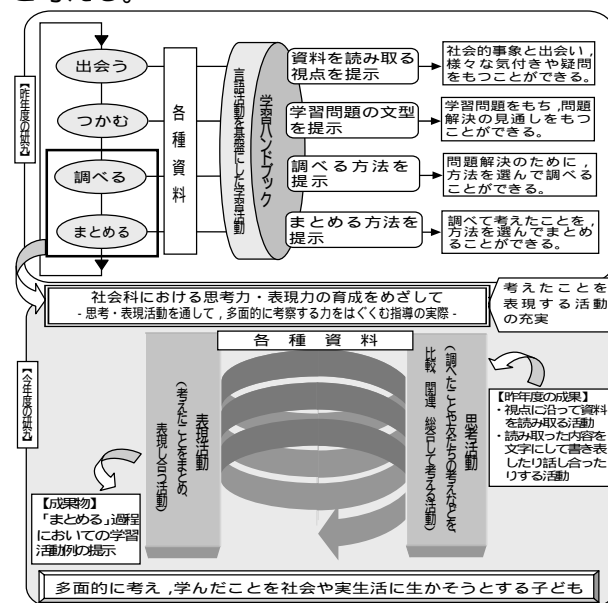


図2-1 研究構造図

(2) 多面的に考察するとは

前項では、自分の考えを表現し合うことは、考え方の視野を広げることにつながり、特に社会科では、広い視野から物事を考えられるようにすることが重要であると述べた。本項では、“広い視野”ということについてもう少し踏み込んで考え、本研究で大切にしている“多面的に考察する”ことについて詳しく述べる。

まず、新学習指導要領より小学校社会科の目標を示す。

小学校社会科の目標

社会生活についての理解を図り、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。(47)

小学校社会科では、“地域社会や我が国における人々の社会生活を広い視野からとらえ、総合的に理解する”ことをねらいとしている。そのことにより、“公民的資質の基礎を養うこと”をめざしているのである。

そして、新学習指導要領の解説社会編には、“公民的資質の基礎”について、「平和で民主的な国家・社会の形成者としての自覚をもち、自他の人格を互いに尊重し合うこと、社会的義務や責任を果たそうとすること、社会の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりすることなどの態度や能力である」(48)と示されている。

つまり、小学校社会科では、社会生活を広い視野から総合的に理解することによって、社会の様々な場面で多面的に考えられるような態度や能力を育成することをめざしている、と考えることができる。

さらに、中学校の新学習指導要領解説社会編を見ると、“広い視野”や“多面的に考察する”ことについての具体的な内容を、より明確にとらえることができる。

中学校社会科の目標

広い視野に立って、社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察し、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を深め、公民としての基礎的教養を培い、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。(49)

中学校社会科では、“広い視野”について「社会科の学習がめざしている多面的・多角的な見方

や考え方にかかわる意味と、国際的な視野という空間的な広がりにかかわる二つの意味が含まれている」(50)と示されている。つまり、“広い視野”に立つためには、多面的・多角的な見方や考え方が必要であると考えられる。

また、“多面的・多角的”について、「『多面的』とは学習対象としている社会的事象が様々な面をもっていることを、また、『多角的』とはそうした社会的事象を様々な角度から考察し理解することを意味している」(51)としている。

つまり、中学校社会科では、地理、歴史、公民における社会的事象を、様々な面や角度から考察することによって、公民的資質の基礎を養うことをめざしていると考えられる。

小学校と中学校の教科目標から“広い視野”と“多面的に考察すること”について、筆者は図2-2のようにまとめた。

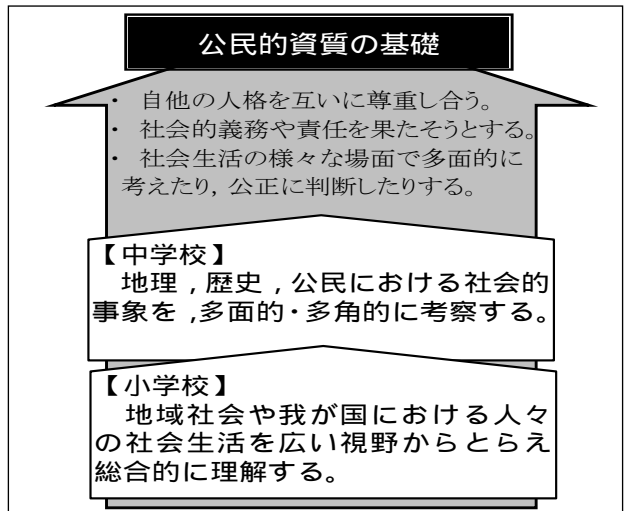


図2-2 小学校、中学校の目標から、“広い視野”と“多面的に考察すること”をまとめた図

「小学校では(中略)社会生活を総合的に理解することを通して、中学校では、地理、歴史、公民の三分野のねらいの実現を通して、いずれも公民的資質の基礎を養うことをねらいとしている」(52)と小学校学習指導要領解説社会編に示されていることから、小学校も中学校も社会科の教科目標は共通して、公民的資質の基礎を養うことであると考えられる。そのために、小学校では社会生活を広い視野から理解すること、中学校では社会的事象を多面的・多角的に考察することが重要なのである。

そして、公民的資質の基礎の一つに“社会生活の様々な場面で多面的に考えたり、公正に判断したりする”ことが示されていることや、小学校での学習の内容や目標が十分達成された上に、中学

校の学習の内容や目標が設定されていると考えられることから、小学校においても多面的に考察することが求められると考える。したがって、本研究では、多面的に考察する子どもの姿をめざすことにした。

それでは、多面的に考察する子どもの姿とは、どのようにとらえることができるのだろうか。先行研究や文献から“多面的に考察する”ことをさぐると、めざす方向性を見出すことができる。

社会的な思考力を高める指導について研究を進めた和田は、“多面的・多角的に考える”ことを「社会的な事象について相互の関連性をとらえたり、社会的な事象を様々な側面から考察したりすること」(53)であると述べている。

また、北は、公正に判断する能力を育成するためには、「社会的な事象を複数の観点から多面的に観察したり、(中略)一面からのみ見て判断するのではなく、多面的にとらえることは、事象や課題を公正に見たり判断するために必要なことである」(54)と述べている。

さらに、森は、批判的思考の構成要素の一つとして多様な視点をもつことを挙げており、「多様な視点をもたせるためには、同一の事柄が立場や視点の違いによってさまざまな異なる意味をもち得ることを授業の中で実際に体験させてやるのが大切である」(55)と述べている。

これらの文献の記述や先行研究は、多面的に考察することの内容・目的・方法を言い当てている。したがって、筆者は、本研究において“多面的に考察する”ということをも以下のようにとらえた。

社会的な事象を、二つ以上の事実や方向から考えること。

図2-3と図2-4は、本研究において“多面的に考察する”ことを示したものであり、実際の授業において、具体的な子どもたちの学習活動を表したものである。

授業では、ただ調べたことをそのまま発表するだけではなく、自分が調べた複数の事実から差異点や共通点を見つけ、そこからどのようなことが考えられるか、また、一つの方向や立場からではなく、違う視点や立場で考えることができるような活動を取り入れる必要があると考える。そのような活動を通して、子どもたちに多面的に考察する能力が育成できると考える。

次節では、多面的に考察する力をはぐくむためには、授業においてどのような手だてが必要なのかについて述べる。

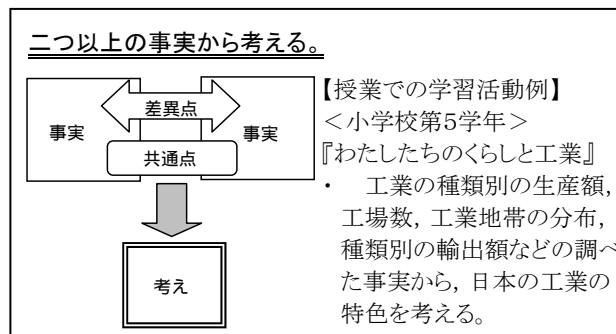


図2-3 二つ以上の事実から考えるイメージ

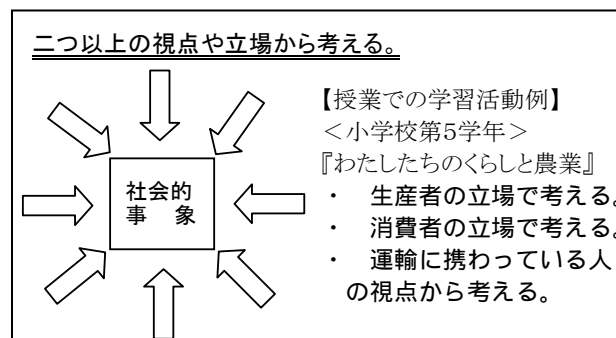


図2-4 社会的な事象を二つ以上の方向から考えるイメージ

第2節 多面的に考察する力をはぐくむための方策

(1) 問題解決的な学習の過程での単元構想の工夫
 多面的に考察する力をはぐくむためには、子どもたちが、複数の事実や多様な考え方に会うようにすることが必要であると考える。

そのために、問題解決的な学習の過程において、子どもたちから多様な意見や考えが出てくるように、単元の構想を工夫する必要があると考えた。

社会科では、これまでに問題解決的な学習の研究や実践が数多く行われ、その中で数多くの成果も生み出されてきた。子どもたちの学習意欲や思考力・表現力を育てる上でも問題解決的な学習は有効であることから、社会科の学習を問題解決的な学習の過程で進めることはとても大切なことであると考える。そこで、問題解決的な学習の過程において、子どもたちから多様な意見や考えを出すことができるような場を設定することで、複数の事実や多様な考えに出会うことができるのではないかと考えた。

まず、単元の構想をする際には、単元の目標やめざす子どもの姿を明確にしておくことが必要であると考える。そこで、学習指導要領から、その単元の学習で、子どもたちが調べる内容や調べる方法、そして子どもたちに考えさせたい内容を抜き出し、次頁表2-1のようにまとめた。

表中に示す は、子どもたちがその単元の学習

で調べる内容である。そして、 はその内容を具体的に示したものである。 は、 で示した内容を調べるための具体的な活動例である。そして、

には、それらの活動を通して子どもたちに考えさせたい内容を示した。これらのことを明らかにした上で単元を構想すれば、単元の出口が明らかになり、そこに至るまでの子どもたちの活動や思考の流れに幅をもたせることができると考える。

そして、実際に単元を構想する上で、表 2-1 のにあたる内容について、単元の終末場面で子どもたちに考えさせたとき、どのような考えが出てくるのかを指導者が想定しておくことが大切であると考え。それは、指導者にとっても子どもたちにとっても、めざす姿を明確にすることができるからである。

筆者の経験則ではあるが、あらかじめ想定していたよりも多様な考えが子どもたちの中から出てきたことで、どのように支援をすればよいのかわからないことがあった。そのような場合に、も

う一度単元の出口で想定した、めざす子どもの姿に立ち返ることで、指導者がそこへ向かうような支援をすることができるのである。以上のことから、単元の出口で子どもからどのような考えが出てくるのかを、指導者が想定しておく必要があると考える。

そして、これらのことを踏まえながら、単元を構想した。次頁図 2-5 は、小学校第 5 学年『これからの食料生産とわたしたち』の単元構想図である。図中の点線で囲んだ と の部分のように、子どもたちから多様な意見や考えが出てくるような場を単元の中に設定した。そして、図中の は、学習を終えての子どもを想定したものである。表 2-1 の中の から、学習を終えての子どもたちの具体的な姿をイメージするのである。そうすることで出口が明らかになり、子どもたちの思考が、想定していた流れから外れたとしても、指導者は、そこへ向かうための支援をすることができるのである。

表 2-1 単元での学習内容（小学校学習指導要領解説社会編より抜粋）(56)

内容	
(2) 我が国の農業や水産業について、次のことを調査したり地図や地球儀、資料などを活用したりして調べ、それらは国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや自然環境と深いかわりをもって営まれていることを考えるようにする。	
ア 様々な食料生産が国民の食生活を支えていること、食料の中には外国から輸入しているものがあること	
「様々な食料生産が国民の食生活を支えていること」	「食料の中には外国から輸入しているものがあること」
① 様々な食料生産と国民の食生活とのかわり	・ 主な食料の自給率や主な輸入先など
② 国民の食生活が主食である米をはじめ、野菜、果物、畜産物、水産物などの主な食料を生産する農業や水産業などによって支えられていることを具体的に調べる。	・ 国民の食生活を支えている主な食料の中には、国内の各地で生産されたものだけでなく、外国からの輸入に依存しているものがあることを具体的に調べる。
③ 商店の広告のちらしを手掛かりにして主な食料の生産地を調査して白地図に書き表す活動 地図帳や地球儀、統計資料などを活用して主な食料のうち自給率の低い食料の品目や輸入先などを調べる活動 (ここでの学習と関連付けて、我が国の貿易の役割について扱うことが考えられる。)	
④ 我が国の農業や水産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを考える。	
イ 我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など	
「我が国の主な食料生産物の分布や土地利用の特色など」	
<ul style="list-style-type: none"> 我が国における主な農産物や畜産物の生産量や主な産地 土地利用の特色、及び主な水産物の漁獲量や主な漁港、漁場などの分布 	
<ul style="list-style-type: none"> 我が国の農業や水産業の概要やそこに見られる特色を具体的に調べる。 	
<ul style="list-style-type: none"> 我が国の農業や水産業の様子を概観し、そこに見られる大まかな特色を調べるために、地図帳や学校図書館の図書、資料などに掲載されている各種の統計資料や分布図などを活用する必要がある。その際、例えば、我が国の主な農産物の分布図と気候に関する資料、主な漁港と海流に関する資料など、複数の資料を関連付けて読み取る活動 	
<ul style="list-style-type: none"> 我が国の農業や水産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、自然環境と深いかわりをもって営まれていることを考える。 	

このように問題解決的な学習の過程において、出口を意識して単元を構想することで、子どもたちが様々な意見や考えを出し合いながら学習を進めることができるのではないかと考えた。

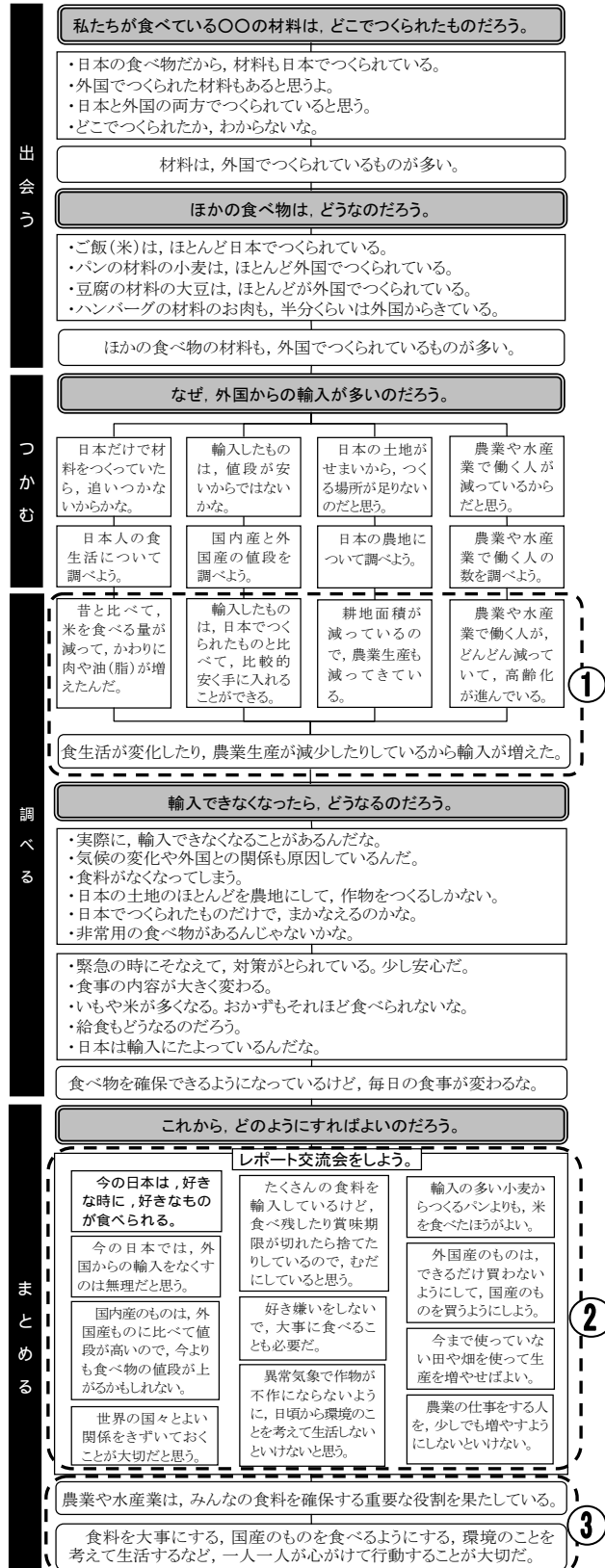


図2-5 小学校第5学年『これからの食料生産とわたしたち』単元構想図

(2)「調べる」「まとめる」過程での学習活動の工夫
 思考力や表現力を育成するためには、調べた事実をそのまま書き写したり、発表したりする活動だけでは不十分であるということは先にも述べた。大切なことは、自分が調べた複数の事実や友だちの考えなどから「どのようなことがいえるのか。」を自分なりに考え、その考えを表現することである。言い換えれば、思考活動と表現活動の二つの活動を連動させることが大切である。

そこで、思考活動と表現活動をより充実させるために、授業の中で、以下のような手だてを具体的にを行うことが必要であると考えた。

思考活動を充実させるために

思考と言語に密接な関係があることは、これまでの先行研究からも述べられている。

子どもたちが考える際には、自分が調べたことや友だちの考えを文字に書いて視覚化することが重要であると考えた。そのために、考える際には付箋紙を活用して、そこに調べたことや友だちの考えを書くようにすることが効果的ではないかと考えた。

付箋紙を活用することの意義について、植地は、「短い言葉で考えたことを文字にするため、書くことへの抵抗感が少ない」「付箋紙を動かすことにより、構成の方法について繰り返し考えることができる」(57)と述べている。

付箋紙はスペースが限られているために、調べたことを短くまとめたり、大事なキーワードを抜き出して書いたりすることが求められる。そのことにより、キーワードを使って短く書きまとめる力が身につけられると考える。

また、付箋紙に書いた内容を比べて、同じ内容のもの同士を集めたり、違う内容のものを他の場所に移動させたりすることで、共通点や差異点を明らかにすることができるのである。どのような点で共通しているのか、同じものにタイトルをつけたり、集めたものの間のつながりや関係を線で結ぶなど、付箋紙を動かして操作することで、比較や関連させて考えたり、総合して考えたりすることができるのである。

そして、友だちの考えや自分とは違う考えを違う色の付箋紙に書くことで、視覚的にも自分とは違う考えをとらえることができ、考える際には、今までになかった考え方や違う視点などを自分の中に取り込むことができるのである。このように、多面的に考察するためにも、付箋紙を活用することは有効な手だてであると考えられる。

表現活動を充実させるために

子どもたちが、普通の授業で、学級という限られた集団だけではなく、大きな集団や社会を意識して話すようにすることが大切だと考える。それは、自分が考えたことを、だれにでもわかるように表現しようとするすることで、社会的事象についての法則や概念などを導き出したり、論理的に考えたりするなどの思考力を育成することにつながるからである。

このことについて、北は、「事実を発表し合うだけでは（中略）話し合いが深まらない。逆に、抽象的な言葉のやりとりでは（中略）一部の子どもだけの学習になってしまう」（58）と述べ、授業で、「例えば」「つまり」などの言葉を使って話すようにすることで、子どもたちに具体化や概念化をうながすことができるとしている。

さらに、高宮は、「論理的な思考を育てる具体的な指導というものは、（中略）子どもに『コミュニティー』を意識させることである」（59）と述べ、自分の考えを話す際には、指し示す言葉を吟味し、丁寧に説明することが大切であるとしている。

このように、根拠を明らかにしたり、具体例を挙げたりするなど、だれにでもわかるようにするために自分の考えを再構成することで、思考力を育成できると考える。つまり、社会科の授業においても、考えたり表現したりする場を設定することが大切であり、その中で、考え方や表現の仕方の指導をする必要があると考えた。

そのためには、まず、表現の仕方のモデルを提示し、子どもがそれらを活用しながら学習を進めることができるようにした。表 2-2 は、考えたことを表現するために、比較、関連、総合の三つの話型を類型化して表したものである。

まず、比較では、自分が調べた二つ以上の事実や友だちの考えなどを比べて考え、表現できるようにした。そして、関連では、比べたことから共通点や差異点を見つけ出して考え、表現できるようにした。さらに、総合では、調べた事実や友だちの考えなどから、どのようなことがいえるかを自分なりに考え、表現できるようにした。

前掲表 2-1(p.13)の を基に想定した単元の出口において、「つまり、食料の輸入は私たちの生活を豊かにしている。」「食料の輸入は、私たちの生活にとってとても重要である。」など、自分なりに考えて表現することができる姿をめざした。したがって、この段階では、子どもたちの考えたことが、社会科の目標を達成できるような内容であ

表 2-2 考え方とその話型

複数の事実から考える	
比較	比べて 同じ点は～である。 ～と～は同じである。 違う点は～である。 ～と～は違っている。 ～によって違いがある。
関連	～と～は同じことから～と考えられる。 ～と～は似ていることから～と考える。 ～と～は違うことから～と考えられる。 ～と～は異なっていることから～と考えられる。 ～と～は～という点で共通している。
総合	つまり～である。 つまり～だと考える。 つまり～がいえる。 したがって～だと考える。 例えば～である。 ～にとって～は重要である。 ～にとって～は重要な役割を果たしている。 ～にとって～は大切なことである。 ～は～な工夫をしている。 ～は～な努力をしている。 ～は～に役立っている。 ～と～は深いかわりがある。
複数の方向や立場から考える	
複数の方向や立場から	～の人たちにとって～である。 ～の立場から考えると～である。 ～や～から～が大切だと考える。 ～側では～だと考えられる。
自分の考え	やはり～だと考えた。 ～だけれど～だと考えた。 友だちの考えから～が大切だと考えた。 だが、しかし、 けれども、さらに

ることが望まれる。

さらに、複数の方向や立場から考えるために、自分とは違う考え方や違う視点などを取り入れながら考え、表現できるようにするための話型を示した。ここでは、なぜ、そのように考えたのか、その考え方に至ったのはなぜかを明らかにして表現できる子どもの姿をめざした。

特に「まとめる」過程では、社会科の学習を通して、自分の考えの深まりや変容についても表現できるようにしたい。自分の考えが、互いの考えを表現し合う活動を通して深まったり変わったりしたことを伝え合えば、友だちの多様な考えから学び合うことの価値を実感することができるのではないかと考える。

そのために、単元の終末である「まとめる」過程において、自分の考えの過程がわかるような表現活動を工夫する必要があると考えた。

次頁表 2-3 は「まとめる」過程における表現

活動例である。そして、図 2-6 は、その中のレポートにまとめるための具体例である。これらの活動において、自分の考えに至った過程も含めて表現することで、友だちの考えや違った考え方を取り入れながら、考えたり表現したりする態度も育成することができるのではないかと考えた。

このような思考活動や表現活動の二つの活動を繰り返し行えるような場を設定することで、自分の考えだけではなく、友だちの多様な考えに気づくことができ、多面的に考察する力をはぐくむことができるようになる。

第 3 章では、思考・表現活動を通して多面的に考察する力をはぐくむための指導・支援の在り方について、子どもの具体的な姿を通して述べる。

表 2-3 「まとめる」過程における表現活動例

中心となる事柄	学習したことをまとめる方法
話すこと	話し合い、交流会、ポスターセッション、ディベート、ニュース番組、ラジオ番組等
書くこと	新聞、レポート、紙芝居、ポスター等
動作化	劇、ペープサート等
視聴覚機器	コンピュータ、ビデオレター等

これからの食料生産とわたしたち 社会 太郎

わたしは、日ごろ食べている小麦や大豆などのほとんどが、外国で作られていることを知った。また、日本の食料自給率が 40 パーセントに落ち、わたしたちが食べている食料の半分以上を外国からの輸入にたよっていることを知っておどろいた。そこで、なぜ日本は外国からの食料の輸入が多いのかを調べた。

学習問題 なぜ、日本は外国からの輸入が多いのだろう。

予想 わたしは、前、米づくりの学習をしたときに農業をする人が減っているということを知った。だから、農業をする人が減って食料をつくる量が少なくなったからではないかと考えた。

調べたこと 農業で働く人の数
農作物の生産量

自分が調べた内容

2000 年の農業で働く人の数は約 700 万人で、1960 年と比べて半分に減っている。(教科書)

第一次産業、第二次産業、第三次産業で比べてみると、第一次産業で働く人がもっとも少なく、農業や水産業で働く人が減っている。とくに農業は若い人が減っている。(社会科資料集)

日本では、50 年ほど前から工業や商業で働く人がふえた。農業で働く人がへり、高れい化が進んでいる。耕地面積がへって農業生産はへってきている。(教科書)

友だちの発表から知ったこと

農業で働く人がほとんどへっている。

日本は、一人あたりの農地面積が他の国と比べて小さい。

昔の食事と比べて、肉や地をつかった食事が多くなった。

考えたこと **交流をして**

自分の調べたことや友だちの発表から、農業で働く人が少なくなって、日本の農業生産がへっていることがわかった。日本でつくっている量が少ないので、それをおぎなうために食料を輸入していることが分かった。

また、昔と比べて食生活がかわったことや、輸入したものは安く手に入れられることなど、いろいろな理由があるから、日本は食料の輸入が多いと思った。

もしかしら、外国から食料の輸入がでなくなることもあるので、これからは日本の農業生産をふやしていかなければいけないとためだと思つた。

これからのようにすればよいのか、自分の考えを書こう。

図 2-6 レポートにまとめるための具体例

- (31) 滝沢武久『ピアジェ理論の展開 - 現代教育への視座』国土社 1992.9 p.148
- (32) 柴田義松他訳「子どもの知的発達と教授(ヴィゴツキー)」明治図書出版 1975.5 p.100
- (33) 大橋精夫訳「学童の思考(シャルダコフ)」明治図書出版 1971.4 p.28
- (34) 前掲(31)
- (35) 松元博志「子どもの頭の中では何が起きているの？」『コンセプトマップ活用ガイド』東洋館出版社 2002.8 p.37
- (36) 斎賀久敬「思考」『新教育学大辞典 第 3 巻』第一法規出版 1990.2 p.395
- (37) 杉山吉茂「『考える』能力や態度を伸ばす指導」第一法規出版 1977.1 p.41
- (38) 鶴養啓子「カウンセリングの現場から - 感じたことを言葉にするプロセスを大切に」『児童心理』金子書房 2007.12 p.28
- (39) 加藤寿朗「表現力」『社会科重要用語 300 の基礎知識』明治図書 2000.4 p.125
- (40) 有田和正「表現力の育成に重点を置くと思考力・判断力も育つ」『現代教育科学 620 号』明治図書出版 2008.5 p.11
- (41) 大森照夫『社会科基本用語辞典』明治図書出版 1977.10 p.121
- (42) 伊藤説明「なぜ、問題解決なのか - その原点に立ち戻って - 」『教育研究』初等教育研究会 2004.7 p.15
- (43) 山田勉「社会科教育における『考える』ことの教育」『考えることの教育』第一法規出版 1977.1 p.141
- (44) 三宮真智子「認知心理学の立場から - 言葉を使って考えを組み立てる力を」『児童心理』金子書房 2007.12 p.22
- (45) 前掲(44) p.22
- (46) 前掲(17) p.10
- (47) 前掲(17) p.10
- (48) 前掲(17) p.12
- (49) 文部科学省『中学校学習指導要領解説社会編』日本文教出版 2008.9 p.17
- (50) 前掲(49) p.17
- (51) 前掲(49) p.17
- (52) 前掲(17) p.11
- (53) 前掲(24) p.3
- (54) 北俊夫他編「改訂小学校学習指導要領の展開 社会科編」明治図書出版 1999.7 p.36
- (55) 森敏昭「論理的な思考力・判断力と知識 - 批判的思考の構成要素 - 」『自ら学び自ら考える力を育てる授業の実践』図書文化社 1990.2 p.49
- (56) 前掲(17) pp.57~61
- (57) 植地洋子「国語科における小中 9 年間の『書くこと』の系統性を踏まえた具体的な指導・支援の在り方」『平成 19 年度研究紀要』京都市総合教育センター 2007.3 p.17
- (58) 北俊夫「社会科の思考を鍛える新テスト - 自作のヒント - 」明治図書出版 2004.6 p.55
- (59) 高宮佳彦「PISA 型読解力 Part9」京都市立翔鷹小学校 <http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/data/102308/21605/4a1a2bf572aa8.pdf> 2009.7.27

第3章 小学校第5学年の実践を通して

小学校第5学年を対象に、「これからの食料生産とわたしたち」と「わたしたちの生活と情報」の単元で授業実践を行った。その実践の様子を、「出会う」「つかむ」「調べる」「まとめる」の問題解決的な学習の過程に沿って報告する。そして、学級全体の様子と焦点を当てた子どもの姿から、指導・支援の有効性について検討する。

第1節 「これからの食料生産とわたしたち」

(1) 単元全体を通して

授業実践を行うに当たって、単元を通じて、子どもたちが自ら問題を解決し、その中で子どもたちから多様な意見や考えが出し合えるようにしたいと考えた。そのためには、まず、単元の構想を工夫する必要があると考えた。

単元の構想を工夫する際には、学習する内容やめざす子どもの姿を明らかにしておく必要がある。そこで、学習指導要領から、「これからの食料生産とわたしたち」の単元で、学習する内容、調べる事柄とその調べ方、考えさせたい内容を抜き出し、前掲表 2-1(p.13)のようにまとめた。

この表の中で大切にしたいことは、表中の に示しているように、子どもたちが調べたことを基にして「我が国の農業や水産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを考える。」ことである。この学習では、食料の生産地を調査したり、自給率の低い食料の品目や輸入先などを調べたりして、我が国の農業や水産業は国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることや、我が国のこれからの食料生産について考えることをめざしている。したがって、単元の学習では、子どもたちが自分の問題にそって調べた事実から、我が国の農業や水産業の役割や、これからの食料生産について考えることが重要である。

そこで、表中 での、理想とする子どもの発言や記述を、以下のように想定した。

- ・ 農業や水産業の仕事は、わたしたちの食生活を支えている。
- ・ 農業や水産業で働く人が減り、生産量も減っているため、輸入にたよらないといけない状況がある。
- ・ 食料自給率を高めるためには、残さず食べることや、国産のものを食べるようにするなど、日ごろから一人一人が心がけることが大切だ。

そして、それらの内容を、単元終了時の発言や記述でのめざす子どもの姿とした。つまり、前掲表 2-1(p.13)からは、 で示している内容を、 や で示している活動を通して学習し、 で示している内容を最終的に子どもたちが考えられるようにした。また、単元を構想する際には、 や で示している活動を取り入れるようにした。

これらのことを踏まえ、単元の構想をしたものが、前掲図 2-5(p.14)の単元構想図である。図中の が、先に示した、子どもの発言や記述においてめざす姿である。このような姿をめざすために、図中の や の部分において、重点的に思考活動と表現活動を繰り返し行う場を設定し、子どもたちが多様な意見や考えを出し合いながら学習が進められるようにした。そして、この単元構想図を基に、実践を行った。

「出会う」過程

まず、農業や水産業の学習で行った産地調べの学習を生かし、私たちが日ごろ食べている米や魚の産地調べをした。私たちが食べている米や魚の中には、日本で生産されているもののほかに、外国で生産されているものも多くあることに気づき、子どもたちは驚いていた。

その後、さらに、身近な食べ物の原料がどこで作られているか関心をもつようにするために、パン、豆腐、ハンバーグ、天ぷらそばなど、日本で消費されている食べ物の原料の、国内自給の割合を調べる活動をした。これらの食料を取り上げたのは、小麦・大豆・そば粉・食肉の飼料など、原料の多くを外国からの輸入に頼っており、それらの原料の国内自給の割合を調べることで、日本の食料自給率や食料生産の問題について考えるきっかけにしたいと考えたからである。

はじめに、パン、豆腐、ハンバーグ、天ぷらそばの写真を提示し、どのようなものが原料に使われているかを考えた。そして、それらの原料の国内自給の割合を考えることができるようにするために、帯グラフを組み入れたワークシートを用い

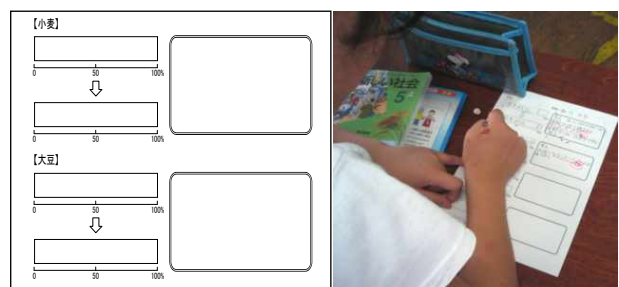


図3-1 ワークシート的一部分とそれに書き込んでいる様子

た。前掲図 3-1(p.17)は、ワークシート的一部分と、それに国産と外国産の割合をグラフに書き込んでいる様子である。

ワークシートには、原料の国産と外国産の割合を帯グラフに書いて予想し、そのように考えた理由を書くことができるように工夫した。そうすることで、児童は、「うどんやクッキーなど、小麦で作られている食べ物がたくさんあるので、小麦は日本で75%くらい作られていると思う。」「パンやケーキなどは外国からきた食べ物なので、小麦は外国産の割合が多いのではないか。」などの考えを書いて予想することができた。

そして、国産と外国産の割合を予想した後、自分でそれらの割合を調べた。さらに、調べた結果を学級全体で共通して認識できるようにするために、国産と外国産の割合を色ごとに示したグラフを板書に提示し、視覚的にとらえられるようにした。その結果、はじめは原料の多くを国内で作っているだろうと考えていた児童は、「大豆を使った料理はよく食べるから、日本で作られている方が多いと思ったけど、外国の方が多かったのでびっくりしました。」という感想をもった。そして、日ごろ食べているものの原料の多くを、外国からの輸入に頼っていることに気づくことができた。

また、はじめは、外国産の原料の割合が比較的多いと考えていた児童は、「外国はたくさんの作物がとれることにびっくりしました。」という感想をもった。そして、小麦や大豆やそば粉などの国産と外国産の割合を知ることによって、それらのほとんどが、外国からの輸入に頼っていることを再認識していた。

それぞれの食べ物の原料の自給の割合を調べた後は、「食料自給率」という言葉の意味を学習し、



図3-2 予想したことを発表している様子

日本の食料自給率を、イギリス・ドイツ・中国・韓国などの諸外国と比べる活動をした。

日本は、カロリーベースでの食料自給率が、これらの国の中でもいちばん低く、実際に

数字で比べる活動をすることで、子どもたちは日本の自給率の問題を実感することができた。そして、「なぜ、日本は食料自給率が低いのだろう。」という思いをもつことができた。

「つかむ」過程

前時の活動を通して、子どもたちは、日本の食料自給率がイギリス・ドイツ・中国・韓国などの諸外国と比べて低いことを理解することができた。しかし、食料自給率と食料の輸入との関係を、より明確にとらえることができるようにするためには、日本国内の食料生産だけでは需要をまかないきれず、足りない分を輸入に頼っていることをさらに理解できるようにする必要があったと考えた。

そこで、「ジュニア農林水産白書」(60)から、食料輸入が多い国のグラフを提示し、どの国が一番多いのかを考える場を設定した。そして、考える際には、地図帳でそれぞれの国の位置を確認する活動を位置づけた。国の位置を確認することで、その国の名前と位置を知るだけでなく、農業生産と国土の面積とを関連させて考えることができるようにするためである。

子どもたちは、日本が前述の諸外国の中で、食料の輸入額が一番多いことを知って驚いていた。そして、なぜ、日本は食料自給率が低く、食料の輸入が多いのだろうという思いをもった。

これらの学習活動を通して、日本の食料生産や自給率について調べるための学級全体の学習問題を、以下のように設定した。

なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう

そして、この学級全体の学習問題に対して、一人一人が予想をした。予想する際には、根拠をもって考えることができるようにするために、農業や水産業で学習した内容や、日本の国土面積などを想起し、それらとつなげて考えるよう働きかけた。その結果、子どもたちは以下のような予想をし



図3-3 根拠を示しながら自分の考えを発表している様子

- ・ 中国と比べて日本の面積が小さいから、作物を育てる場所が少ないからではないか。
- ・ 農業や水産業などの第一次産業がへって、若者がサービス業をするようになったからだと思う。
- ・ 昔から食べている日本のメニューではなく、外国からきたメニューをたくさん食べるようになったからだと思う。
- ・ 日本の農産物の質があまりよくなり、外国産と比べて値段が高いからだと思う。

また、国土の面積だけではなく、日本の人口に注目して考えた児童は、「ドイツや韓国と比べて、面積のわりには人口が多い。」ということに気づき、「それだけ多くの食料が必要で、日本だけでは足りないから、食料を多く輸入しているのではないか。」という考えをノートに書いていた。

これらの記述からは、「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」ということを、農業や水産業界での既習事項や生活経験、国土の面積や人口などと関連させて考えていることがわかる。

このように、考える際の視点を提示し、事実を基にしながらか多様に考えるようにすることで、後に、「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」ということを、調べたことを基にしながらか、多面的に考察することができるようになることを考えた。これは、前掲図2-5(p.14)の に当たる部分である。

次に、それらの予想を確かめるためには、どのようなことを調べたらよいかのわかるようにするために、指導者は、学級全体で調べる事柄を整理し、その内容を明確に示すことにした。指導者は、事前に児童のノートから予想を把握し、学習問題を解決するために調べる事柄をキーワードで整理した。例えば、「昔から食べている日本のメニューではなく、外国からきたメニューをたくさん食べるようになったからだと思う。」という予想は、「日本人の食生活」、「中国と比べて日本の面積が小さいから、作物を育てる場所が少ないからではないか。」という予想は、「日本の農地」というように、調べる事柄をキーワードで示した。

そして、これらの事柄に加え、子どもたちの発表を基に、学級全体で「農業や水産業界で働く人の数」「日本人の職業」「農業や水産業界での生産量」「食料の国内産と外国産の値段」「日本の食料の消費量」などのキーワードを黒板に提示し、児童が学習問題を解決するためには、どのような事柄を調べたらよいかを板書に示すことで整理した。

「予想を確かめるには、どのようなことを調べたらよいでしょう。」と問いかけられ、首をかしげていた児童も、黒板に示されたキーワードを見ながら、自分が調べる事柄をノートに書く姿が見られた。このように、学習問題を解決するために、調べる事柄をキーワードにして明確に示すことで、子どもたちに調べる活動の見通しをもたせることができたと考える。

そして、これらの事柄を、教科書・資料集やパンフレットなどの図書資料や、インターネットなどを使って調べるようにした。

「調べる」過程

「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」という学習問題について、調べたことを書き出すだけではなく、調べた事実を基にして考えることが大切であると考えた。

そのために、前掲図 2-5(p.14)の の部分において、思考活動と表現活動を繰り返し行う場面を設定した。図 3-4 は、活動の流れを図で示したものである。

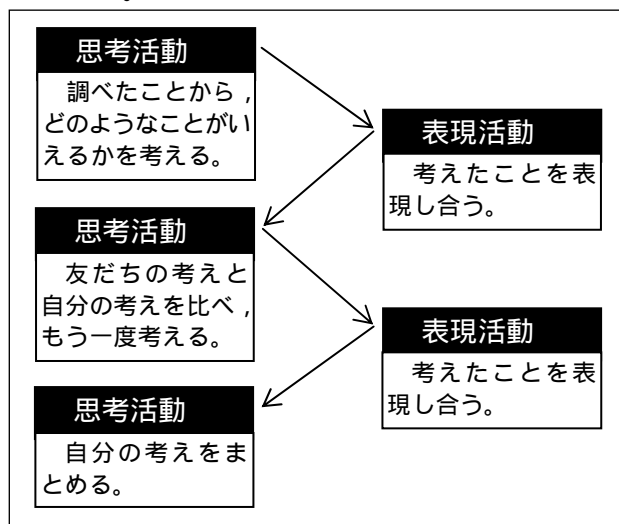


図 3-4 「これからの食料生産とわたしたち」（前掲図 2-5 [p.14] 点線部）での思考活動と表現活動

思考活動では、「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」という学習問題について、自分が調べたことから、どのようなことがいえるかを考えられるようにするために、調べた事実を水色の付箋紙に書き出すようにした。そして、付箋紙に書いた内容を読み比べて、同じ内容のもの同士を集めたり、違う内容のものを他の場所に移動させたりすることで、自分が調べた事実の共通点や差異点がわかるようにした。



図 3-5 調べた事実を水色の付箋紙に書き出している様子(思考活動①)

しかし、子どもたちの中には、調べているうちに様々な事実に出会い、自分の予想を確かめるための付箋紙がどれなのかがわからなくなっている姿が見られた。そこで、学習問題を解決するためには、最終的にどの付箋紙が必要なのかを選び、それを同じ場所に集めるよう指示した。自分の予想を確かめる内容がどれかわからなくなっていた児童は、もう一度付箋紙に書いた内容を見直しな

がら、どれが必要なのかを選んでいった。このように、自分の予想と調べる事柄に照らし合わせながら、学習問題を解決するためには、どの付箋紙が必要なのかを選ぶようにすることで、調べた事実から考えることができたのではないと思われる。

その後、前掲表 2-2(p.15)の“考え方とその話型”の中から、下の文を使って、学習問題を解決するために選んだ付箋紙から、どのようなことがいえるかを考えるようにした。

- ・つまり～である。
- ・つまり～だと考える。
- ・つまり～がいえる。
- ・したがって～だと考える。

図 3-6 は、児童が学習問題を解決するために選んだ付箋紙から、上の話型を使ってどのようなことがいえるか、その考えを書いたノートの一例である。

この児童は、「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」という学習問題に対して、「日本の農業や水産業での生産量が減っているからではないか。」と予想をし、“農業や水産業での生産量”について調べた。様々な食料品の輸入の割合や、農業生産量や漁獲高などについて調べ、昔と比べて輸入量が増えていることから、日本の食料生産だけでは足りないと考えた。そして、これらの調べた事実から、「日本の食料の輸入が多いのは、日本の食料の生産量が減っているからだと考える。」という考えを書いていた。

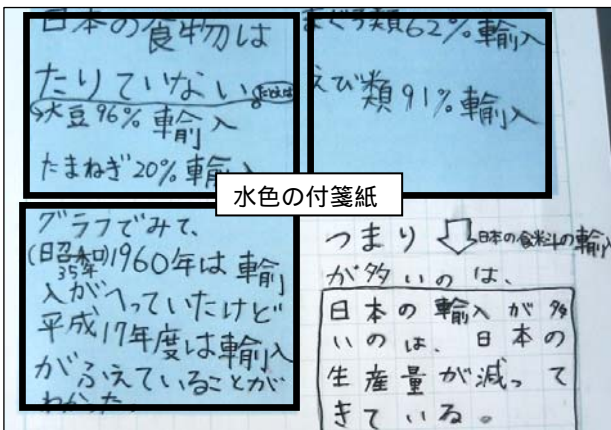


図 3-6 思考活動 でのノート

他の児童も、「つまり、日本の食料の輸入が多いのは、わたしたちの食事の内容が変化したからだと考える。」「日本の食料の輸入が多いのは、農業や水産業で働く人が、少なくなっているからである。」などの考えをノートに書いていた。

これらの記述から、自分が調べた事実を書いた付箋紙から、考え方や話型の文を使って自分の考

えを書きまとめるようにしたことは、調べた事実を基にして、自分なりの考えを構築する姿につながったと考えられる。

次に、「なぜ、日本は食料の輸入が多いのか」ということについて、さらに広い視野から考えられるようにするために、自分とは違う多様な考えに出会うことのできる場を設定する必要があると考えた。

そこで、表現活動 では、「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」ということについて、自分の考えを、ノートを基にして発表するようにした。これまでは、自分の予想を基にした個人での追究活動であったため、自分とは違う考えに出会える場を設定することで、「なるほど。」「そのような考え方もあるのか。」というように、これまでの自分の中にはなかった、より広い視野をもつことができると考えた。

発表する際には、どのような内容について発表しているのかをはっきりと意識できるようにするために、「日本の食料の輸入が多いのは、～からだと考える。」というように、必ず学級全体の学習問題と、前述の話型とを一緒に話すよう指示した。図 3-7 は、ノートを基に自分の考えを発表している様子である。話型を示したことと、自分の考えを書いたノートを基に発表することで、普段は発表することが苦手だと感じている児童は、自信をもって発表することができた。



図 3-7 ノートを基に自分の考えを発表している様子 (表現活動①)

図 3-8 友だちの考えをピンク色の付箋紙に書いている様子(思考活動②)

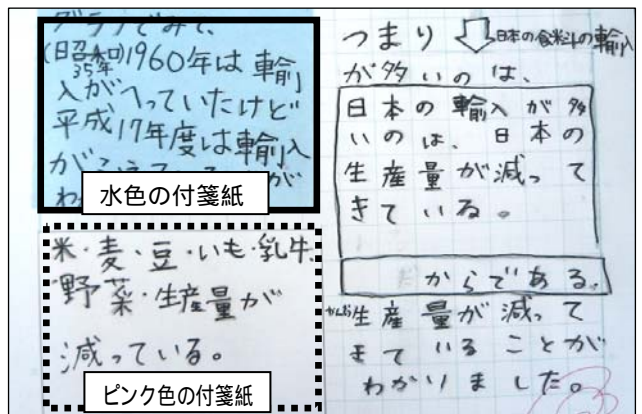


図 3-9 思考活動 でのノート

さらに、自分の考えを表現し合うことで、友だちの考えと自分の考えを比べ、もう一度自分の考えを見直しながら、広い視野で考えることができるようにしたいと考えた。

そこで、思考活動では、自分とは違った考えを取り入れて考えることができるようにするために、友だちの考えを聞いて、「なるほど。」「いいな!」と思ったことを、ピンク色の付箋紙に書くようにした。自分が調べた事実を書いた付箋紙と異なる色の付箋紙に、友だちの考えを書くようにすることで、自分とは違う考えを視覚的にとらえることができるのである。そして、考える際には、今までになかった考えや違う視点などを、自分の中に取り込むことができるのである。

前頁図 3-8 は、友だちの考えをピンク色の付箋紙に書いている様子である。そして、前頁図 3-9 は、前述の図 3-6 で示した児童の、思考活動でのノートである。この児童は、「食料の輸入が多いのは、日本の生産量が減っているからである。」と考え、発表していた。そして、自分の考えを表現し合った後、思考活動では、「米・麦・いも・乳牛・野菜も生産量が減っている。」とピンク色の付箋紙に書きとめていた。

「生産量が減っている。」という同じ考えを友だちからも聞くことで、自分の考えに自信を深めたようであった。このような姿から、自分とは違う考えを取り入れるだけでなく、自分と友だちが同じ考えをもっているということを知ることによって、自分の考えをさらに深めるきっかけにつながったと考えられる。

その後、ピンク色の付箋紙に書いたことを、資料を使って確かめる活動をした。友だちの考えをただ鵜呑みにするのではなく、自分で確かめることで、より多くの事実を基にして、客観的に考えることができるようにしたいと考えた。図 3-10



図 3-10 ピンク色の付箋紙に書いたことを資料で確かめている様子 (思考活動)

のように、子どもたちは、新しく知った事実や、自分と同じ考えの基になった事実を、資料を使って積極的に確かめていく姿が見られた。

表現活動では、友だちの考えを聞いて、自分の考えがどうであったかを振り返ることができるようにするために、友だちの考えから新たに知っ

たことを表現し合うようにした。その際には、前掲表 2-2(p.15)の“考え方とその話型”の中から、「友だちの考えから～だと思った。」「友だちの考えを聞いて～だと考えた。」という文を使って、



図 3-11 友だちの考えから新たに知ったことを発表している様子 (表現活動)

発表するよう指示した。その結果、子どもたちは、「友だちの考えを聞いて、日本の食料の輸入が多いのは、農業や水産業で働く人が減っていることも関係があるんだなと思った。」「友だちの発表を聞いて、自分の考えと同じだったので、やっぱり生産量が減ったからだと思った。」という発表をすることができた。

その後、思考活動では、これまでの思考活動表現活動思考活動表現活動を踏まえ、「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」ということについて、自分の考えを書きまとめるようにした。思考活動において、自分の考えをかきまとめることで、思考活動での自分の考えが、どのように深まったり変わったりしたのかを、子ども自身が見つめ直すことができると考えたからである。また、指導者もこの活動を通して、子どもたちの考えの深まりや変容があったかをとらえることができると考えた。

思考活動では、友だちの考えを聞いて、自分の考えを見直すことをねらいとしていることから、次の考え方や話型の文を活用して、自分の考えを書きまとめるよう指示した。

- ・やはり～だと考えた。
- ・～だけれど～だと考えた。
- ・友だちの考えから～が大切だと考えた。
- ・だが、しかし、けれども、さらに

その結果、子どもたちは、次のように自分の考えを書きまとめていた。

- ・日本は面積が小さく、働く人も少ないので、とれる量も少ない。やはり、日本の食料だけでは少ない。
- ・日本の食料の輸入が多いのは、農地面積がせまいことや外国産の食料が安いからと思っていたけれど、日本人の食生活が変化したり、農業や水産業の生産量が減ったりしていることも関係があるということがわかった。
- ・日本の農地面積がせまくて輸入していることはわかるけど、輸入した食料をむだにしていることもあるので、考え直さないといけないと思った。

このように、思考・表現活動を繰り返し行うことを通して、子どもたちは、私たちの食生活が食料の輸入に支えられていることや、日本の農業・水産業や食料生産が、輸入に頼らざるを得ない様々な問題があることに気づくことができた。

次の時間は、輸入に頼っている現在の食料生産について、問題意識をもって考えられるようにするために、輸入が止まった事実が掲載されている新聞記事を提示し、輸入ができなくなったらどうなるのかを考える活動をした。

まず、1973年にアメリカが大豆の輸出を禁止した新聞記事や、2008年の食糧高騰問題による食料生産国の輸出規制の新聞記事を提示し、内容を読み取る活動をする



図 3-12 新聞記事を読み取っている様子

ことで、日本が、実際に食料を輸入できなくなることがあることを理解できるようにした。そして、「もし、食料の輸入ができなくなったら、どうなるだろう。」と問いかけ、そのことについて意見を交流した。子どもたちからは、「おかずやおやつなどが食べられなくなってしまい、食事の量が減って、最後には食べ物がなくなってしまうと思う。」「食料の値段が高くなる。」「輸入ができなくなると、日本は食料自給率が低いから、いろいろな食べ物の量が減って、日本の食生活が安定せず、きびしくなる。」などの意見が出され、それぞれの考えをノートに書きとめた。

次に、日本が、食料を輸入できなくなったときに備えて、国が「不測時の食料安全保障マニュアル」を策定していることや、その内容について紹介した。さらに、輸入ができなくなったときの国内生産だけの食事メニューを提示し、普段、私たちが食べている食事の内容と比べた。そうすることで、食料の輸入は、今の日本にとって非常に重要な役割を果たしていると同時に、様々な要因により、食料の輸入ができなくなる事実があるということを理解することができた。

これらの活動を通して、子どもたちからは、「食料の輸入ができなくなったら、ごはんもおなかいっぱい食べられなくなるから、輸入ができなくなるのは、つらいなあと思いました。」といった声が聞かれ、食料の輸入が、豊かな食生活を支えていることを実感していた。

「まとめる」過程

「まとめる」過程では、子どもたちが、この単元で学習したことをただまとめるだけではなく、学習したことを基にしながら、これからの日本の食料生産をどのようにすればよいかということについて、広い視野で考えながら、意見交流ができるようにしたいと考えた。

そのために、前掲図 2-5(p.14)の の部分において、思考活動と表現活動を繰り返し行う場を設定した。図 3-13 は、活動の流れを図で示したものである。

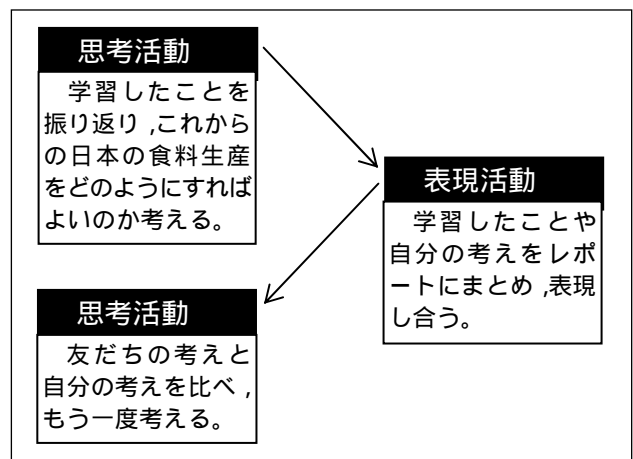


図 3-13 「これからの食料生産とわたしたち」(前掲図 2-5 [p.14] 点線部)での思考活動と表現活動

思考活動 では、まず、私たちの食生活は、外国からの食料の輸入に支えられていることや、日本の農業・水産業や食料生産が、輸入に頼らざるを得ない様々な問題があることなど、これまでに学習した内容を振り返った。

次に、「では、これからの日本の食料生産をどのようにすればよいだろうか。」と発問した上で、「日本は、これからも食料を外国からの輸入に頼るべきでしょうか。それとも国内生産を増やして自給率を高めるべきでしょうか。」と問いかけ、自分の考えを明らかにできるようにした。子どもたちには、まず、自分がどちらの立場に近いかを決め、その理由を考えるよう助言した。

そして、後に、レポートに自分の考えをかきまとめられるようにするために、自分が考えたことをノートにメモをするように指示した。子どもたちのノートからは、「外国から来たものは、日本のもの比べて値段が安いものが多いので、日本のものが売れなくなる。だから、輸入を減らしたり、食べ物をむだにしたりしないようにすることが大切だ。」「もっと農業をする人が増えるように、新しい制度をつくれればよい。」などの記述が見られた。

表現活動 では、自分がそのように考えた過程がわかるようにするために、これまでに学習した内容を明らかにしながら、「これからの日本の食料生産をどのようにすればよいのだろう」ということについて、自分の考えをかきまとめるようにした。そのために、前掲図 2-6(p.16)や図 3-14 のように、レポートにかきまとめるための具体例を提示し、これまでに学習したことを明らかにしながら、自分の考えをかきまとめられるようにした。

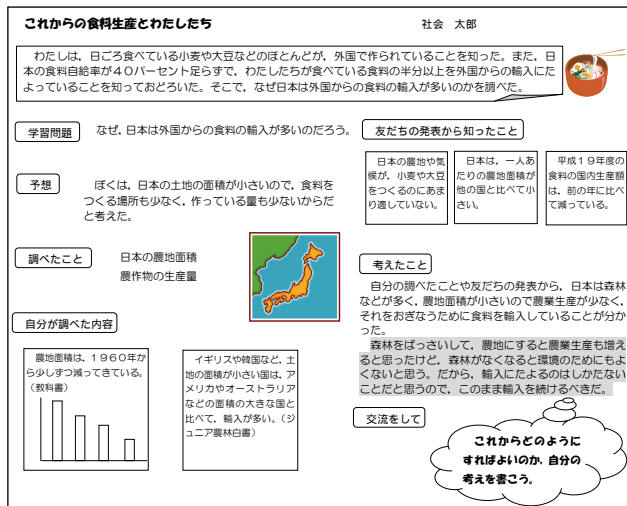


図 3-14 レポートにまとめるための具体例

具体例には、「なぜ、日本は外国からの食料の輸入が多いのだろう」という、この単元を貫く学習問題やそれに対する予想、そして、その学習問題を解決するために調べる事柄などを示し、これまでに学習してきたプロセスがわかるようにした。さらに、自分が調べた事実や友だちの考えから新たに知ったことなどを、実際の学習で使った付箋紙を活用して示すようにすることで、自分の考えを再構成できるようにした。そして、調べた事実（付箋紙）からどのようなことがいえるか、考えたことを書きまとめ、最後に、その考えや学習した内容を踏まえた上で、「これからの日本の食料生産をどのようにすればよいのだろう」という問いに対する自分の考えを書くようにした。



図 3-15 具体例やノートを基にして、レポートにまとめている様子

そして、表現活動 では、提示した具体例を参考にしながら、自分の考えをかきまとめた。

図 3-16 は、児童がまとめたレポートの一つで

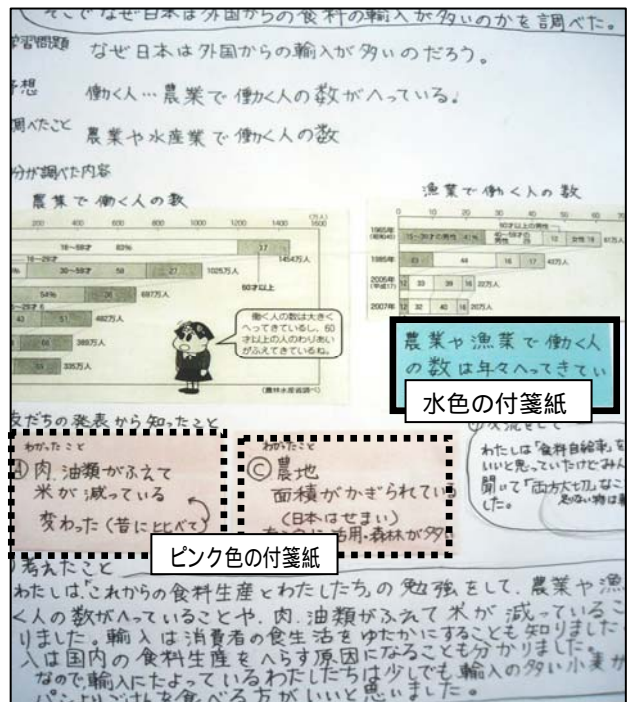


図 3-16 児童がまとめたレポート

ある。図中の黒枠内は、実際の学習で活用した調べた事実を書いた付箋紙である。レポートにかきまとめるための具体例を提示し、学習で使った付箋紙を活用して、自分の考えを再構成する場を設定した結果、次のような考えをまとめる姿が見られた。

- ・ 食料を輸入することで、食生活が安定する。でも、輸入ばかりにたっていると、日本の農業がつぶれる。輸入が止まってしまうこともあるので、これからは、農業で働く人をふやして、自給率を高めるべきだと思う。
- ・ 日本人の食生活が和食から洋食へと変化していることや、農業をする人が減っていることなどが原因で輸入が増えた。輸入すると食べ物の種類は豊富になるが、もし、その相手の国が輸出するのをやめると日本の食料は不足する。これからは、輸入にたよらず、自給率を上げるべきだと思う。

その後、「これからの日本の食料生産をどのようにすればよいのだろう」というテーマについて、自分の考えを表現し合うために「レポート交流会」を開いた。

レポート交流会では、まず、これまでの学習を振り返ることをかねて、輸入がもたらす効果や問題点について出し合った。輸入がもたらす効果としては、「食事のメニューが豊かになる。」「国産のものに比べて値段が安い。」などの意見が出された。一方、反対に問題点としては、「安全性に問題がある。」「輸

入ができなくなったときに困る。」「日本のものが売れなくなって、農家が少なくなる。」「食料自給率が下がる。」などの意見が出された。

その後、「食料を外国からの輸入に頼っている日本は、これからどのようにすればよいだろう。」と問いかけ、自分の考えを発表する場を設定した。発表する際には、かきまとめたレポートをプロジェクターで映し、それを基にして発表することで、学習した内容や自分がそのように考えた理由などをわかりやすく発表できるようにした。

ここでは、討論するのではなく、一人一人の考えを認めながら、子どもたちが、様々な考えに出会うようにすることで、自分の考えを深めたり広げたりすることができるようにしたいと考えた。そのために、指導者は子どもの考えを黒板に整理してまとめ、後で、子どもたちが、友だちの考えと自分の考えとを比べることができるようにした。



図3-17 レポート交流会の様子

交流を進める中で、「食べ物に困らないようにするためには、食料の輸入は続けるべきだ。」「豊富に食べられる分、食べ残しもあるので、日本の生産で足りない分だけ輸入したほうがよい。」「輸入を減らして、もう少し自給率を高めるべきだ。」「農業は高齢化が進んでいるので、今のうちから若い人が増えるような制度をつくった方がよい。」などの声が、子どもたちから聞かれた。

思考活動では、レポート交流会の最後に、交流を通して考えたことを、自分のレポートに書き加えるようにした。レポート交流会で、友だちの様々な考えを聞くことで、自分の考えがどのように深まったり広がったりしたかを振り返ることをねらいとしていることから、次の考え方や話型の文を活用しながら、自分の考えをレポートに書き加えるようにした。

- ・やはり～だと考えた。
- ・～だけれど～だと考えた。
- ・友だちの考えから～が大切だと考えた。
- ・だが、しかし、けれども、さらに

その結果、子どもたちは、次のように自分の考えを書き加えていた。

- ・最初は、自給率を高めればよいと思っていただけ、交流をして、輸入も続けないと、食べられないものが増えるから、日本で作れるものは日本で作り、作れないものは輸入すればよいと思った。
- ・輸入を減らして自給率を高めることが大切だと思ったけれど、交流をして、やっぱり輸入を減らし、少しでも食料自給率を上げるべきだと思った。これからは環境のことや世界の国との関係を考えて、自分の国で食べるものは、自分の国で作っていくほうがよいと思った。

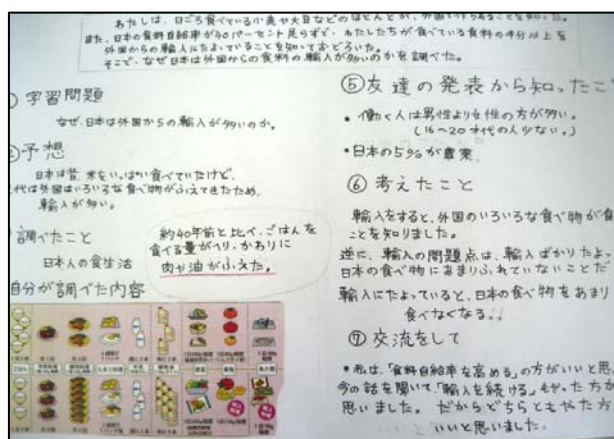


図3-18 交流をして考えたことを書き加えたレポート

これらの記述からは、子どもたちは、これからの日本の食料生産をどのようにすればよいかということについて、複数の事実や方向から考えることができたのではないと思われる。

(2) 個を見つめて

本研究では、多面的に考察する力をはぐくむためには、以下のような手だてが必要であると考え、授業実践をした。

- ・単元の構想を工夫する。
- ・思考・表現活動を繰り返し行う場を設定する。
- ・複数の事実から考えるために、付箋紙を活用する。
- ・考え方や話型、まとめ方などのモデルを提示する。

「これからの食料生産とわたしたち」での実践を3人の児童に焦点を当て、これらの児童の姿が第2章第1節2項で述べている“多面的に考察する姿”であったかを、以下の視点で分析する。

- ・付箋紙の数やノートの記事内容から、二つ以上の事実や方向から考えることができたかを分析する。
- ・思考・表現活動を繰り返し行う前と後でのノートの記事内容を比較し、考えの深まりや変容が見られたかを分析する。

A 児の姿を通して

「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」という学習問題に対して、A 児は、既習事項を活かしながら、「日本は土地がせまいからだと思う。」「畑が減って作る場所がなくなってきたから。」という予想をした。

そして、「日本の農地」について調べ、以下のように、調べた事実を付箋紙に書いた。(塗りつぶしの記述は、実践でのピンク色の付箋紙である。)

日本の農地面積 465万ha 食料自給率 40%	フランスの農地面積 2,969万ha 食料自給率 122%	イギリスの農地面積 1,696万ha 食料自給率 70%
日本の人口1人あたりの農地面積を外国と比べると小さい。	1人あたりの農地面積 日本3.6a イギリス28.4a フランス49.6a	日本人の職業の5%だけしか農業をしていないのは、少なすぎると思いました。

A 児は、日本の農地面積や食料自給率を、イギリスやフランスと比べ、それらの調べた事実から次のような考えをノートに書いていた。

日本は農地面積が小さいので、食料を作れる量が少なく、食料の輸入が多い。

複数の事実を比べ、差異点を見つけ出し、そこからどのようなことがいえるかを考えていたと思われる。そして、思考活動と表現活動を繰り返し行うことを通して、次のような考えをノートに書いた。

日本の食料の輸入が多いのは、日本は農地面積が小さく、働く人も少ないのでとれる量も少ない。つまり、日本の食料だけでは足りないから、外国からの食料の輸入が多い。

また、「食料を外国からの輸入に頼っている日本は、これからどのようにすればよいだろう」ということについては、最終的に次のようにレポートに書きまとめた。

わたしは、食料自給率を高めた方がいいと思っていたけれど、ほかの人たちの意見を聞いて、輸入を続けることも大切だと思いました。

これらの記述からは、思考活動と表現活動を繰り返し行うことで、これまでの自分の考えにはなかった視点を取り入れながら考えていたと思われる。しかし、「ほかの人たちの意見を聞いて」という記述で終わっていることから、表現活動を通して新たに知ったことから、もう一度、じっくりと考え直すことができずとも考えられる。

B 児の姿を通して

「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」という学習問題に対して、B 児は、これまでの農業の学習を思い出し、「日本は農業をする人が減ってきているから、作る量も減ってきて、輸入にたよるしかなくなる。」という予想をした。

そして、「農業や水産業で働く人の数」について調べ、以下のように、調べた事実を付箋紙に書いた。

農業 1960年1454万人 1970年1025万人 1980年 690万人 1990年 482万人 2000年 389万人 2005年 335万人	漁業 1965年 61万人 1985年 43万人 2005年 22万人 2007年 20万人	年齢割合(農業) 16歳～29歳 6% 30歳～59歳25% 60歳以上 69%
年齢割合(漁業) 15歳～39歳12% 40歳～59歳32% 60歳以上 40%	日本人の食生活は、昔より肉・油類が増え、米が減っている。	日本の農地 日本はせまいが、森林が多く農地面積が限られている。

B 児は、農業や水産業で働く人の数の推移や、年齢別の割合を調べ、調べた事実から次のような考えをノートに書いていた。

農業や漁業をする人の数が年々減ってきていて、しかも、若い人が減ってきているから食料の輸入が多い。

働く人の数が、農業でも水産業でも年々減ってきていることや高齢化してきていることなど、農業と水産業の共通の問題点を見つけ出し、そこから自分の考えを書いたと思われる。そして、思考活動と表現活動を繰り返し行うことを通して、次のような考えをノートに書いた。

日本の食料の輸入が多いのは、日本人の食生活が昔より米を食べる量が減って、肉・油類が増えたり、働く人の数が年々減ってきて、作る量が減ってきたりしたからである。

また、「食料を外国からの輸入に頼っている日本は、これからどのようにすればよいだろう」ということについては、最終的に次のようにレポートに書きまとめた。

最初は輸入がストップしたときのために、ちょっとずつ農家を増やしていき、輸入を少しずつ減らしていく方がいいと思っていた。けれど、みんなの話を聞いて、輸入も続けないと食べられない物が増えるから、日本で作れるものは日本で作り、作れないものだけを輸入すればいいと思った。

自分の考えが一つの方向だけではなく、違う方向や視点からも考えることができたのは、思考・表現活動を繰り返し行った成果と考えられる。

C児の姿を通して

「なぜ、日本は食料の輸入が多いのだろう」という学習問題に対して、C児は、既習事項や生活経験から、「日本は小さな国だから漁をする人も少ないから作る人が少ない。」「食べ物をむだにしているから食料が足りなくなって輸入しないとイケない。」という予想をした。

そして、「農業の生産量」と「食料のむだ」について調べ、次のような内容を付箋紙に書いた。

C児は、日本でどれくらいの量の食べ残しがあるのかに注目して調べ、それらの量を知って大変驚いていた。そして、調べた事実から次のような考えをノートに書いた。

日本では、1年間で1900万トン(1人あたり150kg)も捨てられている。

1日1人当たり、ご飯茶碗3杯分残している。食べ残しは、食料自給率を低下させる原因。

食べ残し
食堂・レストラン3.1%
宿泊施設13%
結婚披露えん22%
えん会15.2%

米・麦・いも・乳牛・野菜などの生産量が減っている。

日本は食料をむだにしていることが多いので、食料自給率が低下して、輸入をしないとイケなくなる。

そして、この考えを表現し合い、思考活動と表現活動を繰り返し行うことを通して、以下のような考えを書いた。

つまり、日本の食料の輸入が多いのは、米や麦の生産量が減っているからである。

友だちの発表を聞いて、「なるほど。」と思った内容の記述が多く、自分がこだわって調べて考えた「食べ残し」についての内容と友だちの考えとを関連させながら、自分の考えを再構成することができなかつたと思われる。

また、「食料を外国からの輸入に頼っている日本は、これからどのようにすればよいだろう」ということについては、最終的に次のようにレポートに書きまとめた。

考えたことは、やっぱり食料自給率を上げた方がいいということです。これからは、輸入ばかりにたよらず、電化製品を作るのを少し少なくして、自給率を上げた方がいいと思いました。

あと、学習問題は同じなのに、いろいろな予想が出てきたので、少しおどろきました。

C児のこれらの記述からは、社会的事象を様々な事実を基に考えようとしている姿勢がうかがえる。しかし、単元を通して、C児の考えがどのように変わったのか、その過程がわかるようにするための支援が必要だったと考えられる。

児童の姿から

3人の児童の姿から、本研究で大切にしたい手だてが有効であったかを考える。

まず、単元の構想を工夫したことは、子どもたちが、多様な意見や考えを出し合えることにつながったと考えられる。これは、C児の記述からもわかるように、多様な予想や考えの下、自分で調べたり考えたりしながら学習問題を解決できるようにすることで、後に、様々な考えを出し合いながら社会的事象を広い視野で考えることができたと考えられる。

一方で、新たな考えや視点を取り入れようとするあまり、自分の考えや、そのように考えた過程がわからなくなっている姿が見られた。自分の考えを再構成する際には、単元の終末場面で、もう一度ノートを振り返ったり、自分の考えと新たな考えとをじっくりと照らし合わせたりする時間を設定することが必要だったと考えられる。

次に、思考・表現活動を繰り返し行う場を設定したことは、自分の考えが深まったり変わったりしたことにつながったと考えられる。これは、考え方や話型を提示したことにもかかわるが、思考・表現活動を通して、最終的に自分が同じ考えでも、「やはり」「けれども」などの語を使って自分の考えを書いていたことから推測できる。思考活動で、もう一度自分のフィルターを通して考えていた形跡であると考えられる。また、友だちと同じ意見でも、納得する姿が見られた。これらのことから、思考・表現活動を繰り返し行うことは、自分の考えを深めたり変容させたりすることに有効であったと考えられる。

最後に、調べた事実を付箋紙に書き出したことは、複数の事実から考えることにつながったと思われる。前述の3人の児童だけではなく、どの児童も、二枚以上の付箋紙をノートに貼っていた。同じ内容でも、違う資料で確かめるようにすることで、より正確に客観的に考えることができる。このことは、多面的に考察したり公正に判断したりすることにつながるはずである。また、付箋紙に書き出した事実をそのまま発表した児童は一人もいなかった。付箋紙に書き出すことで、調べた事実と自分の考えとを明確に分けることができたからだと考えられる。

今後、考えをより深めたり広げたりするためには、付箋紙を操作したり、矢印やタイトルなどをつけたりする活動をさらに充実させた上で、調べた事実から考えるようにすることが必要である。

第2節 「わたしたちたちの生活と情報」

(1) 単元全体を通して

前述した実践例と同様に、まず、授業実践を行うに当たって、単元を通じて、子どもたちが自ら問題を解決し、その中で子どもたちから多様な意見や考えが出し合えるようにしたいと考え、単元の構想を工夫した。

そこで、学習指導要領から、「わたしたちの生活と情報」の単元で、学習する内容、調べる事柄とその調べ方、考えさせたい内容を抜き出し、表3-1のようにまとめた。

この表の中で大切にしたいことは、子どもたちが調べたことを基にして、表中の に示しているように「情報化の進展は国民の生活に大きな影響

表3-1 「わたしたちの生活と情報」の単元での学習内容（小学校学習指導要領解説社会編より抜粋）(61)

内容	
(4)	我が国の情報産業や情報化した社会の様子について、次のことを調査したり資料を活用したりして調べ、情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考えるようにする。
ア 放送、新聞などの産業と国民生活とのかかわり	
「放送、新聞などの産業と国民生活とのかかわり」	
①	近年の情報化の進展に伴い、我が国ではテレビやラジオ、新聞、電話、コンピュータなどの様々な情報手段が普及していること。 ・ 人々は放送や新聞などの産業が発信する情報を日常生活や産業活動の多方面で活用し、様々な影響を受けていること。
②	放送、新聞などの産業と国民生活とのかかわりを具体的に調べる。 ・ マスメディアの働きや、それを通して送り出された情報が国民生活に大きな影響を及ぼしていることを調べる活動
③	情報を発信する側に求められる役割や責任の大きさ、情報を受け取る側の正しい判断の必要性などについて考えをまとめる活動
④	情報化の進展は国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考える。
イ 情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり	
「情報化した社会の様子と国民生活とのかかわり」	
①	情報ネットワークを有効に活用して公共サービスの向上に努めている教育、福祉、医療、防災などの事例のいずれかを取り上げる。
②	多種多様な情報を必要に応じて瞬時に受信したり発信したりすることができる情報ネットワークの働きが公共サービスの向上のために利用され、国民生活に様々な影響を及ぼしていることを具体的に調べる。
③	公共サービスにかかわる仕事に従事している人から話を聞いたり、パンフレットなどの資料を効果的に活用したりする活動 ・ コンピュータを実際に使ってインターネットで情報を収集したり発信したりする活動
④	情報化の進展は、国民の生活に大きな影響を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考える。 ・ 放送、新聞などの中から一つを選択して取り上げる。 ・ インターネットを活用して遠隔地の学校と授業を行っている事例 (福祉や医療などの施設や機関が情報を共有し、地域の人々へのサービスの向上に努めている事例、地震や土砂災害、犯罪の発生を即時に知らせる取組の事例など、児童やその家族、身近な地域の人々の日常生活との結び付きが見られるもの)

を及ぼしていることや情報の有効な活用が大切であることを考える」ことである。

この学習では、マスメディアの働きや、それを通して送り出された情報が国民生活に大きな影響を及ぼしていることを調べたり、コンピュータを実際に使ってインターネットで情報を収集・発信する活動をしたりすることで、我が国の情報産業や情報化した社会の様子について考えることをめざしている。

したがって、単元の学習では、子どもたちが自分の問題にそって調べた事実から、我が国の放送や新聞などの産業の役割や、情報化した社会の様子と国民生活のかかわりについて考えることができるように、授業の展開を工夫する必要があると考えた。

そこで、前掲表 3-1(p.27)の での、理想とする子どもの発言や記述を、以下のように想定した。

- みんながそれぞれに「速く、正しく、正確にニュースを伝える」ことをめざして、多くの人が役割を分担して仕事をしているから速く伝えることができる。
- 受ける側は、正しい情報かどうかを確かめることが大切だ。
- 一つの情報だけでなく、いろいろな方法で情報を集めて比べてみるのが大切だ。
- 情報を受ける側の立場になって考えてから、情報を送らなければならない。
- どんな内容でも、人に聞いたり調べて確かめたりしてから伝えることが大切だ。
- 私たちの生活にとって、身の回りにある情報はとても便利だ。
- 自分にとって必要な情報を選び、うまく活用していかなければならない。

そして、それらの内容を、単元終了時の発言や記述でのめざす子どもの姿とした。つまり、前掲表 3-1(p.27)からは、 で示している内容を、 や で示している活動を通して学習し、 で示している内容を最終的に子どもたちが考えられるようにした。また、単元を構想する際には、 や で示しているような活動を取り入れるようにした。

これらのことを踏まえ、単元の構想をしたものが、図 3-19 の単元構想図である。図中の が、先に示した、子どもの発言や記述においてめざす姿である。このような姿をめざすために、図中の や の部分において、重点的に思考活動と表現活動を繰り返し行う場を設定し、子どもたちが多様な意見や考えを出し合いながら学習が進められるようにした。そして、この単元構想図を基に、次のような内容で実践を行った。

「出会う」過程

まずは、私たちの身の回りにある“情報”が、どのようなものかをとらえられるようにするために、“情報”という言葉聞いて思い浮かべることを出し合った。子どもたちからは、「新聞やテレビのニュース。」「天気予報。」「パソコンや携帯電話。」「みんなに何かを教えてくれるもの。」「なくてはならないもの。」などの声が聞かれ、私たちが、様々な方法で情報を得ていることや、情報が私たちの生活にとって必要なものであることなどを実感していた。

そして、2009年10月8日に台風18号が近畿地方に接近・上陸したとき、どのような方法で台風

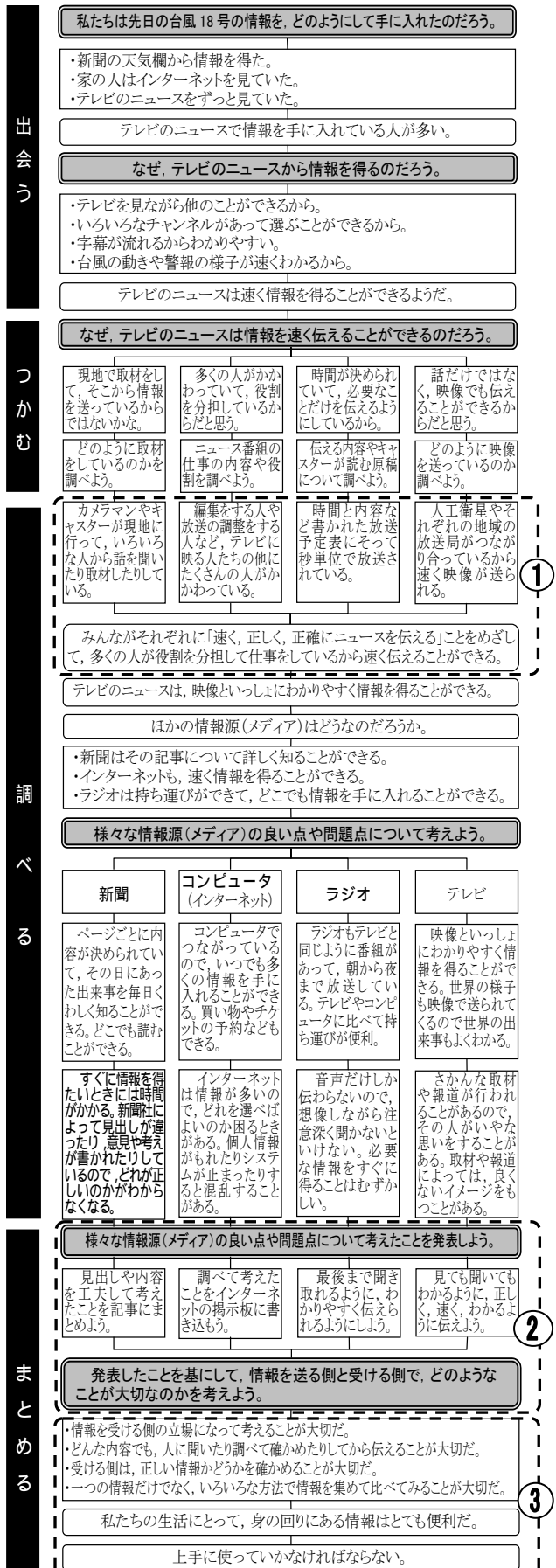


図 3-19 小学校第5学年『わたしたちの生活と情報』単元構想図

に関する情報を得ていたのかを思い出すようにした。この活動を通して、普段私たちが、社会の出来事に関する情報を、どのような方法で得ることが多いのかを気づくことができるようにしたいと考えた。その結果、ほとんどの子どもたちが、台風に関する情報をテレビのニュースから得ており、テレビのニュースから情報を得る理由として、「速報があって、速く伝えてくれるから。」「映像があって動きがわかるから。」「見たり聞いたり両方できて、わかりやすいから。」などの声があがった。意見交流を通して、子どもたちは、「テレビのニュースは速く情報を得ることができる。」という思いをもった。

次の時間には、「テレビのニュースは速く情報を伝えることができる。」という思いを確かにするために、台風18号に関するニュース番組を視聴した。そして、時刻ごとに各地から情報を伝えている様子を見ることで、刻々と変わる現地の様子を知ることができ、どのようにして速く情報を伝えているのかを考えるきっかけにしたいと考えた。

実際の授業では、午前11時30分と正午の、同じ地点から台風の様子を伝えているニュースを視聴して比較し、どこがどのように変わっているかを見つけるように指示した。



図3-20 台風の様子を伝えるニュースを視聴している様子

子どもたちは、映像を見たりアナウンスを聞いたりしながら、「台風の範囲を示す黄色い円が北に移動した。」「次の進路を予想する赤い点が出ている。」「アナウンサーが、雨や風が激しくなってきたと伝えている。」といったことに気づいていた。

そして、指導者は、「なぜ、わずか30分で、さっきと違う情報を送ることができるのだろう。」と問いかけ、テレビ局で働く人たちが情報を速く伝えるために、どのような仕事をしているのかを考えられるようにした。その結果、子どもたちは、「風の強さを測れる機械で調べて放送している。」「台風の情報を、日本に来る前から調べているのではないか。」「支局の人が映像をとっていて、テレビ局に送っている。」などの意見を発表していた。

「つかむ」過程

「つかむ」過程では、これまでの学習を活かし、放送局で働く人々の工夫・努力や、放送局の果たす役割について追究するための学習問題を以下のように設定した。

なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう

はじめに、この学習問題に対して、予想をするように指示した。予想する際には、根拠をもって考えることができるようにするために、前時に学習したことや、これまでに自分が見たテレビ番組やニュース番組などを想起し、それらとつなげて考えるよう働きかけた。子どもたちは、テレビのニュースで見た中継の様子や、テレビ番組で様々な仕事をしている人がいることなどを思い出しながら予想をし、ノートにまとめていた。

続いて、自分の予想を発表し合う場を設定した。これは、自分の考えを表現することで、今までに自分が気づかなかった新たな視点に気づき、多様な予想の下に広い視野から追究活動ができるようにしたいと考えたからである。自分の予想を発表し合い、友だちの考えを聞くことで、これまでに、「テレビ局の人が現場に行き行って取材をしているから。」と考えていた児童は、「取材した情報を送ることも大切なんだ。」ということに気づき、「多分、パソコンなどの機械を使って送っているかもしれない。」と、考えをノートに書く姿が見られた。

以下に示すのは、予想として子どもたちが書きまとめたものの一部である。

- ・ 気象予報士が、人工衛星で今の状況、次の状況をキャッチしてテレビ局に伝えているからではないか。
- ・ 新しい情報を取るために、テレビ局の人たちを手分けして、現場に行く人や、知らせを待つようにしている。
- ・ すばやく情報を得たいために、機械を使ったり人と人が協力したりしているからだと思う。
- ・ 全国それぞれに放送局をおいていて、その場所の様子をメールみたいに放送局にささっと送って、放送するんだと思う。
- ・ テレビ局が、とった映像をまとめて電波で送り、その電波を家のアンテナが受信して、情報が送られるしくみになっている。
- ・ 何人かのアナウンサーが現場にいて、そこから様子を伝えているからだと思う。
- ・ 伝えるばかりではなく、アナウンスの内容を考えている人もいるのではないか。

そして、それらの予想を確かめるためには、どのような内容を調べたらよいかのわかるようにするために、学級全体で調べる事柄を整理し、明確に示すようにした。指導者は前もって児童のノートから予想を把握しておき、学習問題を解決するために調べる事柄をキーワードにした。

そして、子どもたちの予想を基に、学級全体で“テレビ局で働く人や役割”“取材の仕方や様子”“情報や映像を送る方法”などのキーワードを黒板に提示し、子どもたちが学習問題を解決するためには、どのような事柄を調べたらよいかのわかるようにした。

その後、指導者は、これらの事柄について調べるには、どうすればよいか問いかけた。すると子どもたちからは、「テレビ局を見学すればわかるかもしれない。」「資料集やテレビ局のパンフレットを見れば、何かわかるかもしれない。」などの声があがった。そこで、テレビ局を見学したり、教科書・資料集・パンフレットなどの図書資料やインターネットを使ったりして調べることを、次時の活動として位置づけることにした。

「調べる」過程

まず、テレビ局で働く人の役割や、ニュース番組がどのようにして放送されているかについて知るために、テレビ局を見学した。

見学する際には、限られた時間で必要な情報をより多く取り出すことが大切であると考えた。そこで、見学の事前学習として、昨年度の研究で開発した「学習ハンドブック」(62)の中から、図 3-22 に示す“見学する視点”を活用しながら、どのようなことに注目して見学をすればよいかを具体的に理解できるようにした。そして、取り出した情報を基に、知っていることと比べたりつなげたりしながら見学できるようにしたいと考えた。

また、図 3-23 に示す“インタビューの仕方の具体例”を活用し、質問をする方法やメモのとり方などがわかるようにした。

実際の見学では、テレビ局で働く人から話を聞いたりスタジオの中を見学したりすることで、ニュース番組がどのようにして作られているかを知ることができた。



図 3-21 見学をしている様子

見学するとき、ここに注目!		
見よう	<ul style="list-style-type: none"> ・どんな感じがするかな? ・何が見えるかな? ・どんな音が聞こえるかな? ・どんなにおいがするかな? 	思ったことや感じたことを書いてみよう。
注目しよう	<p>はたらく人のようす もの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人数 ・服ぞう ・仕事 ・表じょう ・くろうやくふうがわかるかな? ・機械 ・道具 ・何のためにあるのかな? 	たくさん見つけて書いてみよう。
くらべよう	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の知っていることとくらべてみよう。 (いつも見ている番組と同じで～だ。わたしが見ている番組とちがって～だった。) ・友だちが見つけたこととくらべてみよう。 	自分が知っていることとくらべて書いてみよう。 友だちと同じところや、ちがうところを見つけてみよう。
つなげよう	<ul style="list-style-type: none"> ・つなげて考えてみよう。 ・予想してみよう。 (～なのは、たぶん～だから。 など) 	自分の知っていることや友だちの考えとつなげてみよう。

図 3-22 見学する視点

インタビューをして聞いてみよう

- ・ おいそがしいところすみません。
- ・ 小学校の 年生です。
- ・ 社会科で について勉強しています。
- ・ お話を聞かせていただけますか。



[れい]

インタビューすること

聞いたことは、
かならずメモを
しましょう。

・どんなことに気をつけて仕事をされていますか。



・情報を速く伝えるために、工夫していることは何ですか。

・どのようにして映像を送っているのですか。

・ありがとうございました。

図 3-23 インタビューの仕方の具体例

子どもたちの見学でのワークシートの記述を見ると、見学を通して以下のような事実を得ていたことがわかる。

- ・ スタジオの中には震度計があり、番組中に地震が起きたとき、すぐに伝えられるようにしている。
- ・ スタジオの中には時計がたくさんあり、決まった時間内にすべての内容を伝えるようにしている。
- ・ その日の出来事を、その日のうちに放送して伝えるようにしている。
- ・ テレビの向こう側の人々が、何を知りたいのかを考えて番組を作っている。
- ・ 一人で原稿を書くときと間違えることがあるので、何人かで原稿を書いて、みんなでチェックしている。
- ・ ディレクターやデスク以外にも、いろいろな役割がある。
- ・ 一つの番組を作るのに、50人、多いときには、100人の人がかかっている。
- ・ 一人一人に役割があって、責任がある。

そして、見学だけでは十分にわからなかったことや、さらに知りたいことなどを、教科書・資料集・パンフレットなどの図書資料、インターネットなどを活用したり、ニュースの取材の仕方や様子をまとめたビデオを視聴したりして調べるようにした。



図3-24 インターネットや図書資料を活用して調べている様子

ここでは、子どもたちが調べたことを、単に書き写すだけではなく、「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」ということについて、調べた事実を基にして考えることが大切であると考えた。

そこで、前掲図3-19(p.28)の単元構想図の部分において、思考活動と表現活動を繰り返し行う場を設定した。図3-25は、活動の流れを図に示したものである。

思考活動では、「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」ということについて、自分が調べたことから、どのようなことがいえるかを考えられるようにするために、調べた事実を水色の付箋紙に書き出すようにした。そして、付箋紙に書いた内容を比べて、同じ内容のもの同士を集めたり、違う内容のものを他の場

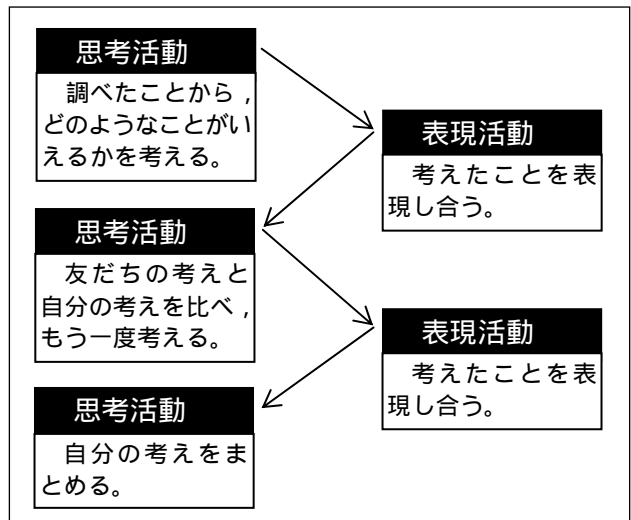


図3-25 「わたしたちの生活と情報」(前掲図3-19(p.28)点線部)での思考活動と表現活動

所に移動させたりすることで、自分が調べた事実の共通点や差異点を、視覚的にわかるようにした。

さらに今回は、一回目の実践での課題を踏まえ、集めた付箋紙にタイトルをつけるように指示した。それは、調べた事実からどのようなことがいえるかを考える際に、そのタイトルを手がかりとすることで、調べた事実から、自分の考えを書くことができるようにするためである。

図3-26は、集めた付箋紙にタイトルをつけた児童のノートの一例である。

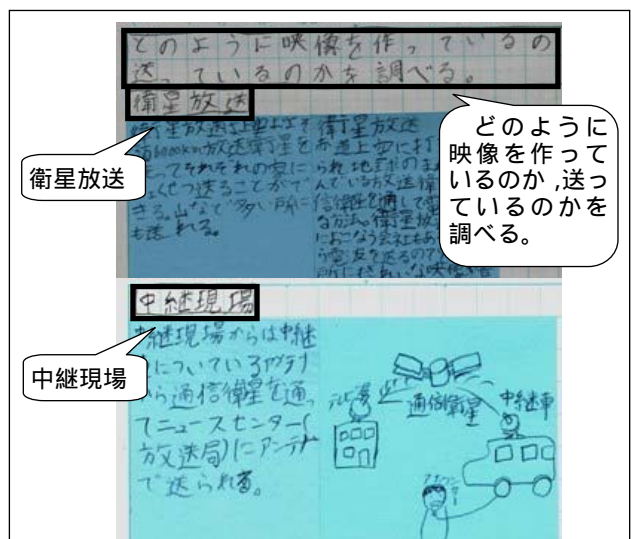


図3-26 同じ内容の付箋紙を集め、それらにタイトルをつけたノートの一例

この児童は、どのように映像を作ったり送ったりしているのかについて調べ、調べた事実を書いた付箋紙を同じ内容のもので集め、「衛星放送」「中継現場」のタイトルをつけた。はじめは、調べた事実を書き出した付箋紙をノートに貼っているだけであったが、タイトルをつけるために、付

箋紙の内容を振り返って整理しているうちに、新たなつながりに気づくことができたようである。その後、気づいたことを、新たな付箋紙にイラストに表して書いていた。このように、集めた付箋紙にタイトルをつける活動をすることで、調べた事実のまとめりやつながりを、より明確にすることができたと考えられる。

次に、前掲表 2-2(p.15)の“考え方とその話型”の中から、下の文を使い、整理した付箋紙から、どのようなことがいえるかを考えるようにした。

- ・つまり～である。
- ・つまり～だと考える。
- ・つまり～がいえる。
- ・したがって～だと考える。

前掲図 3-26(p.31)のノートを書いた児童は、付箋紙につけたタイトルをキーワードにしながらか、「テレビのニュースが情報を速く伝えることができるのは、中継現場から電波で情報を送り、衛星放送や地上波放送で家庭に情報を伝えているからだ」とノートに書いた。他の児童も、「世界各国の放送局とニュースを交換したり、24時間とぎれることなく世界中から情報を集めたりしているからだ」と考える。「世界や日本の各地でテレビ局の人が働いていて、情報を衛星や地上波で送っているからだ」と考える。」などのように、ノートに書きまとめていた。

そして、一回目の実践と同様に、「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」ということについて、さらに広い視野から考えられるようにするために、自分とは違った多様な考えに出会えるようにしたいと考えた。

そこで、表現活動では、「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」ということについて、自分の考えを、ノートを基にして発表する活動をした。そこでは、「テレビのニュースが情報を速く伝えることができるのは、～だからである。」というように、学級全体の学習問題と前述の話型とを一緒に話すようにした。そうすることで、一回目の実践の成果であったように、話し合いの視点がぶれず、その内容に対して自分の考えを深めたり広げたりすることができると考えたからである。

また、子どもたちが自分の考えを発表する際には、テレビのニュースが情報を速く伝えることができる仕組みを視覚的にとらえられるようにするために、指導者は子どもたちの発表を、板書を使ってまとめるようにした。

図 3-27 は、児童の発表をまとめた板書の一部である。“テレビ局で働く人や役割”“取材の様子”など、一人一人が調べた事実を基にして考えたことを、矢印やイラストを用いてまとめ、全体の意見が視覚を通して把握できるようにした。

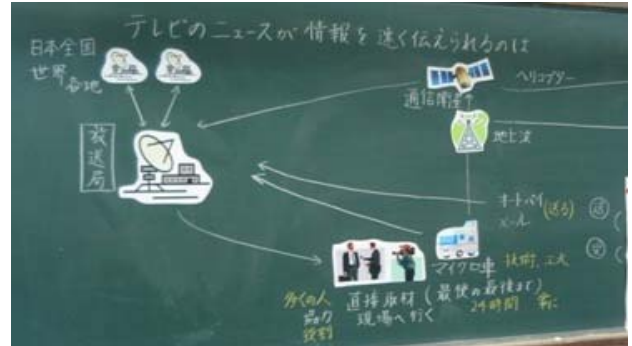


図 3-27 児童の発表をまとめた板書の一部

このように板書でまとめることで、これまで取材について調べていた児童は、どのようにして情報が送られるのかを知ることができ、情報の送り方について調べていた児童は、テレビ局でどのような人が、どのような役割で仕事をしているかということについて知ることができた。

思考活動では、自分とは違った考えを取り入れて考えることができるようにするために、友だちの考えを聞いて、「なるほど。」と思ったことや、これまでに知らなかったことなどをピンク色の付箋紙に書くようにした。異なる色の付箋紙に、友だちの考えを書くようにすることで、自分とは違う考えを視覚的にとらえることができるようにするためである。そのことにより、「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」ということについて、今までになかった考えや違う視点などを自分の中に取り込みながら、さらに広い視野で考えることができるようにしたいと考えた。さらに、ピンク色の付箋紙に書いた内容と自分の考えを比べたりつなげたりしながら、もう一度自分の考えを再構成できるようにしたいと考えた。

前掲図 3-26(p.31)のノートを書いた児童は、ピンク色の付箋紙に、「たくさんの人が何百人も働いている。」「多くの人が、時間までに放送できるようにしている。」「深夜でも情報を集めている。」と書いていた。そして、自分の考えとピンク色の付箋紙に書いたこれらの内容から、最終的に「テレビのニュースが情報を速く伝えることができるのは、何百人もの人が役割をもって働いていて、みんなが時間までに放送できるようにして、情報を(ニュース)を電波で送っているから。」と考える

まとめていた。

表現活動 では、ピンク色の付箋紙に書いた内容と、自分の考えを比べたりつなげたりしながら自分の考えを再構成し、発表するようにした。その際にも、表現活動 と同様に、ノートに書いた自分の考えを基にして発表するように指示した。

また、ここでは、表現活動 を通して、自分の考えがどのように深まったり変わったりしたかを実感することができるようにするために、自分の考えを発表する際には、「交流をして～だと思った。」「友だちの考えを聞いて～だと考えた。」という話型を使って、発表するようにした。その結果、「わたしは、たくさんの人が働いているということしか知らなかったです。けれど、友だちの発表を聞いて、深夜でも情報を集めていることがわかりました。一人では速くできないから、役割を分担していることもわかりました。だから、何百人もの人が働いて



図 3-28 ノートを基に自分の考えを発表している様子

いて、深夜でも情報を集めている、さらに、伝送機などで電波を使って送っているから速く情報を伝えることができる。」と

いう発表をする姿が見られた。

思考活動 では、「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」ということについて、自分の考えを書きまとめる活動を位置づけた。思考活動 において、自分の考えを書きまとめるようにすることで、これまでの学習を振り返ったり、我が国の放送産業の役割について、さらに理解を深めたりすることができるのではないかと考えた。

そのために、思考活動 では、前掲表 2-2(p.15)の“考え方とその話型”の中から、次のような考え方や話型の文を子どもたちに提示して、自分の考えを書きまとめるように指示した。

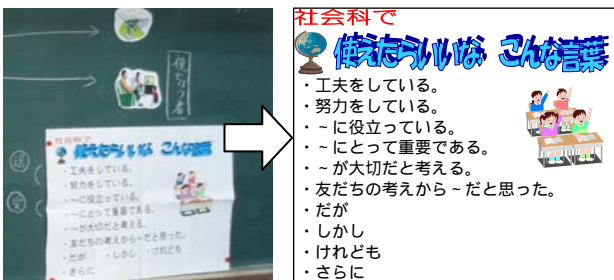


図 3-29 考えを書きまとめる際に提示した資料

以下に示すのは、子どもたちがノートに書きまとめたものの一部である。

- ・ 送る側の人は、家庭に電波がとどくまで、こんなにもたくさんのお話をいっしょにひとまとめにするなんて、すごくたくさんのお話をしているし、たくさんのお話をしているんだなと思った。情報を受け取る側は、送る側の努力や工夫で、聞きやすく役に立つ情報を得ることができると思った。
- ・ 放送局の人は、少しでも視聴者の人がわかりやすいように努力しているんだなと思いました。それは、最後まで取材したりしっかりと編集したりしているからです。やることがいっぱいで大変だと思うけど、放送局がなかったらとても困るので、がんばってほしいです。
- ・ ぼくは、この勉強をして、改めてニュースは大切だなと思いました。理由は、自分が何気なく見ているニュースも、取材や放送などの苦労があって、見ることができるんだなと思ったからです。これからもニュースを大切に見ていきたいです。
- ・ 放送局の人たちは、まとめてみたりわかりやすく説明をしたりする努力をしているので、視聴者もわかりやすいんだなあとと思った。それと、放送局の人たちが、視聴者の欲しい話題をもってくるから興味がもてるんだなと思いました。
- ・ テレビのニュースは、わたしたちの生活の中でも役立っていると思う。けれども、それはわたしたちが思っている以上に大変で、時間をかけていることが今回の勉強ですごくよくわかった。

これらの記述を見ると、情報を伝える側は、情報を受け取る側の願いや思いにこたえるために様々な工夫や努力をしていることに気づいている様子がうかがえる。また、情報を受け取る側は、伝えられた情報を多方面で利用していることなど、情報を伝える側と受け取る側の双方向から、テレビのニュースから伝えられる情報についてとらえることができたと考えられる。

さらに、次の時間からは、テレビだけではなく、私たちが情報を受け取っているほかのメディアについても詳しく調べるようにした。

そのために、まず、テレビのニュースについて学習したことを振り返った。子どもたちからは、「テレビのニュースは、映像と一緒に速くわかりやすい情報を得ることができる。」といった声があった。そこで、指導者は、「では、他のメディアはどうなのだろう。」と問いかけ、新聞やラジオやインターネットなど、それぞれのメディアの特徴について考えるようにした。子どもたちからは、

「新聞は、一度にたくさんの情報を得ることができる。」「ラジオは何かをしながら聞くことができる。」「インターネットは、自分から情報を得ることができる。」などの発表があり、生活経験を基にして考える姿が見られた。

次に、指導者は、「それらのことを確かめるために、他のメディアの特徴について詳しく調べていこう。」と呼びかけ、以下の課題を提示した。

様々なメディアの良い点や問題点について考えよう

そして、様々なメディアの良い点や問題点について、自ら考えられるようにするために、様々なメディアから情報を得る体験をする機会を設定した。ここでは、子どもたちの声を基にしながら、「新聞」「ラジオ」「インターネット」「本」「ちらし」「テレビ」を取り上げた。また、子どもたちが体験したことから、思ったことや気づいたことを付箋紙に書き出す活動を取り入れた。

良い点は水色の付箋紙に、問題点は黄色の付箋紙に、そのほかに気づいたことは白色の付箋紙に書き出すようにした。さらに、自分が選んだメディアの良い点や問題点をほかのメディアと比べて考えることができるようにするために、前掲表2-2(p.15)の「考え方とその話型」の中から、「比べて」「違う点は～である。」「～によって違いがある。」「同じ点は～である。」という考える際の視点を活用した。



図3-30 様々なメディアから情報を得ている様子

実際にメディアから情報を得る体験をすることで、「新聞は、ラジオやテレビと違って、何度もじっくり読み直すことができる。」「インターネットは、欲しい情報をたくさん得ることができる。」「ちらしは、ひと目でわかるように書かれている。」「本は一つの事柄について、詳しく書かれている。」など、良い点や問題点について気づいたことを付箋紙に書き出すことができた。

「まとめる」過程

「まとめる」過程では、子どもたちが、学習したことを基にしながら、我が国の放送や新聞などの産業の役割や、情報化した社会の様子と国民生活のかかわりについて、広い視野から考えられるようにしたいと考えた。

特に、終末場面では、情報を送ったり受け取ったりする際には、どのようなことが大切かを考える活動を通して、自分に必要な価値ある情報を見分け、活用することが大切であることに気づくことができるようにしたいと考えた。そこで、前掲図3-19(p.28)のの部分に示すように、思考活動と表現活動を繰り返し行う場を設定した。図3-31は、活動の流れを図に示したものである。

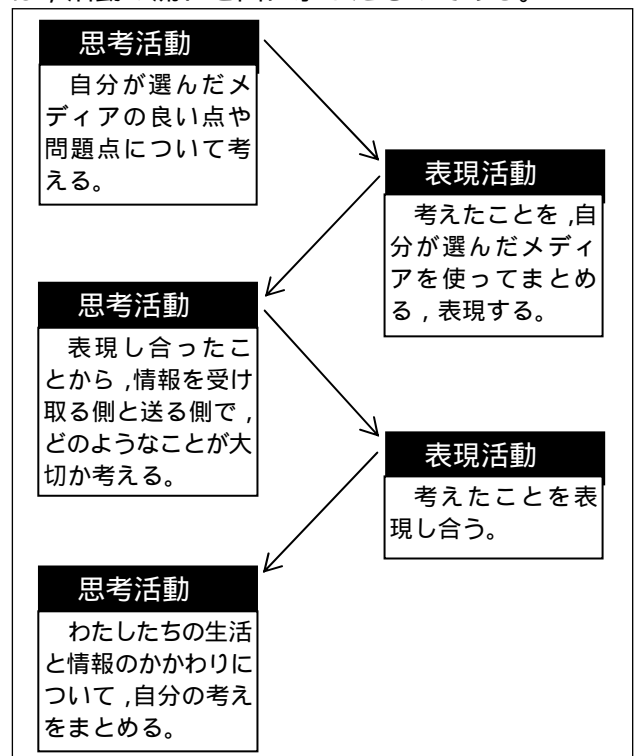


図3-31 「わたしたちの生活と情報」(前掲図3-19(p.28)点線部)での思考活動と表現活動

思考活動では、書き出した付箋紙を整理することで、自分が選んだメディアの良い点や問題点について考えることができるようにした。子どもたちは、付箋紙に書いた内容を比べて、同じ内容のものを集めたり、違う内容のものを他の場所に移動させたりしながら付箋紙をノート上で並べかえることで、気づいたことを整理することができた。



図3-32 付箋紙を整理している様子

表現活動 では、自分が選んだメディアの良い点や問題点について考えたことを、自分が選んだメディアを使ってまとめるようにした。例えば、新聞を選んだ児童は、新聞にまとめて表現したり、ラジオを選んだ児童は、ラジオ原稿にまとめて、実際のラジオのように音声だけで表現したりした。こうすることで、それぞれのメディアで情報を伝える際には、どのようなことを大切にしなければならないのかを、情報を伝える側として考えることができるのである。

そこで、子どもたちが、自分の選んだ方法で、自らまとめることができるようにするために、図3-33 に示しているまとめ方の具体例を提示した。具体例には、それぞれのメディアの特徴を活かしてまとめることができるようにするために、まとめるときのポイントを示した。そして、付箋紙に書いた内容を、具体例に示されたこれらのポイン

トに沿って、自らまとめられるようにした。

子どもたちにこれらの具体例をプリントに印刷して手渡すと、すぐにまとめはじめ、付箋紙に書いた内容を振り返ることができた。これは、まとめ方の具体例を提示することで、子どもたちが、どのようにまとめたらよいか見通しをもつことができ、主体的に活動することにつながったのではないかと考えられる。

自分が選んだ方法でまとめた後は、まとめたことを表現し合う活動の場を設定した。新聞や本やちらしは、人数分印刷して配付し、それらを実際に読んで、それぞれのメディアの良い点や問題点を読み取ることができるようになった。インターネットは、書き込んだ掲示板をテレビやプロジェクターで映し出し、学級全体で見ることができるようになった。また、補足がある場合は、それらに加え、口頭で伝えるようにした。

新聞にまとめて、伝えよう。

メディア新聞

月日発行
5年 期

新聞の良さ

新聞は、毎日発行される。最新のニュースや、地域の出来事、スポーツ、芸能、文化など、さまざまな情報が載っている。また、写真やイラスト、図表などを使って、わかりやすく伝えられている。新聞を読むことで、世の中のことをよく知ることができ、自分の生活に役立つ情報を得ることができる。

新聞のデメリット

新聞は、紙媒体であるため、環境にやさしくない。また、紙面が狭いため、重要な情報が載らないことがある。また、印刷に時間がかかるため、最新のニュースが載らないことがある。

まとめるときのポイント

記事の量と、書く場所をきめることを「わりつけ」といいます。見出しや絵・写真・グラフ・表などの大きさ、入れ方も考えて、わりつけをしよう。内容がひと目でわかるような見出しや、読んでもかたくなな見出しを考えよう。自分が調べたことを、絵やイラストなどをとづつ、わかりやすくまとめてみよう。自分が調べたり、人の話を聞いたりしたことも書いてみよう。まとめられたら、調べたことがわかりやすく伝えられているか、間違いがないかどうかを確認しよう。

インターネットの掲示板にまとめて、伝えよう。

インターネットの掲示板は、誰でも簡単に投稿できる。また、投稿した内容は、いつでも見ることができ、他の児童もコメントや返信ができる。インターネットの掲示板は、インターネットの良さを最大限に活かすことができる。また、インターネットの掲示板は、インターネットのデメリットを克服することができる。

インターネットの掲示板の良さ

インターネットの掲示板は、誰でも簡単に投稿できる。また、投稿した内容は、いつでも見ることができ、他の児童もコメントや返信ができる。インターネットの掲示板は、インターネットの良さを最大限に活かすことができる。また、インターネットの掲示板は、インターネットのデメリットを克服することができる。

インターネットの掲示板のデメリット

インターネットの掲示板は、匿名性があるため、悪質な投稿や誹謗中傷の投稿が行われることがある。また、インターネットの掲示板は、インターネットのデメリットを克服することができる。

まとめるときのポイント

インターネットの掲示板は、誰でも簡単に投稿できる。また、投稿した内容は、いつでも見ることができ、他の児童もコメントや返信ができる。インターネットの掲示板は、インターネットの良さを最大限に活かすことができる。また、インターネットの掲示板は、インターネットのデメリットを克服することができる。

コンピュータの掲示板にまとめて、伝えよう。

インターネットの良さは、検索をするとき、そのキーワードに合った情報がたくさん出てくることです。その情報は、写真や動画、地図などいろいろな情報を見ることができ、出てきた情報から、自分が知りたい情報を抽出することができます。さらに、その場所へ行かなくても、インターネットで申し込みや予約もできるのでとても便利です。インターネットは、わたしたちの生活にも役立っています。

インターネット、ここに注意!

インターネットは便利ですが、注意する点もあります。それは、いつの間にか自分の知らない情報が、自分の知らないところで出てくる場合があります。また、インターネットは、誰でも簡単に投稿できるため、悪質な投稿や誹謗中傷の投稿が行われることがあります。さらに、インターネットは、匿名性があるため、悪質な投稿や誹謗中傷の投稿が行われることがあります。また、インターネットは、匿名性があるため、悪質な投稿や誹謗中傷の投稿が行われることがあります。

まとめるときのポイント

教室のコンピュータの画面の左側にある「いいね」をクリックします。また、その内容は、教室や学年や学校全体でいいねを見ることができ、どれにするかは、先生と相談してから決めます。新規作成（しんききせき）あたらし（く）をクリックして、まとめたい内容をキーボードで打ち込んでいきます。上の欄のように、タイトルとその内容を考えながら打ち込みましょう。調べたことがわかりやすく伝えられているか、間違いがないかどうかを確認しよう。まとめたい内容をキーボードで打ち込んでいきます。上の欄のように、タイトルとその内容を考えながら打ち込みましょう。調べたことがわかりやすく伝えられているか、間違いがないかどうかを確認しよう。まとめたい内容をキーボードで打ち込んでいきます。上の欄のように、タイトルとその内容を考えながら打ち込みましょう。

インターネットの掲示板にまとめて、伝えよう。

インターネットの良さは、検索をするとき、そのキーワードに合った情報がたくさん出てくることです。その情報は、写真や動画、地図などいろいろな情報を見ることができ、出てきた情報から、自分が知りたい情報を抽出することができます。さらに、その場所へ行かなくても、インターネットで申し込みや予約もできるのでとても便利です。インターネットは、わたしたちの生活にも役立っています。

インターネット、ここに注意!

インターネットは便利ですが、注意する点もあります。それは、いつの間にか自分の知らない情報が、自分の知らないところで出てくる場合があります。また、インターネットは、誰でも簡単に投稿できるため、悪質な投稿や誹謗中傷の投稿が行われることがあります。さらに、インターネットは、匿名性があるため、悪質な投稿や誹謗中傷の投稿が行われることがあります。また、インターネットは、匿名性があるため、悪質な投稿や誹謗中傷の投稿が行われることがあります。

まとめるときのポイント

教室のコンピュータの画面の左側にある「いいね」をクリックします。また、その内容は、教室や学年や学校全体でいいねを見ることができ、どれにするかは、先生と相談してから決めます。新規作成（しんききせき）あたらし（く）をクリックして、まとめたい内容をキーボードで打ち込んでいきます。上の欄のように、タイトルとその内容を考えながら打ち込みましょう。調べたことがわかりやすく伝えられているか、間違いがないかどうかを確認しよう。まとめたい内容をキーボードで打ち込んでいきます。上の欄のように、タイトルとその内容を考えながら打ち込みましょう。調べたことがわかりやすく伝えられているか、間違いがないかどうかを確認しよう。まとめたい内容をキーボードで打ち込んでいきます。上の欄のように、タイトルとその内容を考えながら打ち込みましょう。

図3-33 まとめ方の具体例



図 3-34 具体例を基にして考えたことをまとめ、発表している様子

自分の考えを表現し合う活動を通して、子どもたちからは、それぞれのメディアの良い点として、「ラジオは持ち運びができて、何かをしながら情報を得ることができる。」「新聞は人の意見が取り上げられているので、自分の考えを比べることができる。」「インターネットはつながっているので、検索するだけでなく、予約や申し込みなどができる。」「本は、一つの事柄について詳しく書かれている。」といった発表があった。

また、問題点としては、「ちらしは見てすぐわかるように書かれているが、注意書きは小さく書かれているので、よく見ないといけない。」「だれでもインターネットで情報を流すことができるので、すべてが正しい情報だとは限らない。」「新聞は文字で詳しく書かれているけど、映像や画像がなくイメージが浮かびにくい。」「本は対象が限られているので、欲しい情報をさがすことができないこともある。」などの発表があった。

このように、それぞれのメディアを通して、良い点や問題点が伝えられたことで、それぞれの良い点や問題点を実感として受けとめることができたと思われる。

思考活動では、表現し合ったことから、情報を受け取る側と送る側で、どのようなことが大切かを考える場を設定した。ここでは、図 3-35 に示しているように、それぞれのメディアの良い点や問題点について、聞いたり読み取ったりした内容を表に書き込み、比較して考えることができるワークシートを活用した。子どもたちは、ワークシートに書き込まれたそれらの内容から、情報を受け取る側と送る側で、どのようなことが大切かということについて、次のような考えを書きまとめた。

わたしたちの実感と情報		名前 ()		
◎調べたことを発表し、情報を受け取る側と送る側で、どのようなことが大切かを考えよう。				
	コンピュータ(インターネット)	新聞	本	ちらし
良い点				
問題点				
その他が に気づいたこと				

【情報を受け取る側】 ← → 【情報を送る側】

思ったことを書きこむ

図 3-35 書き込んだ内容から考えるためのワークシート

【情報を受け取る側】

- ・ どんな気持ちで書いたか、その人の気持ちを考えながら読むことが大切だと思う。
- ・ 得た情報が、本当に正しいか判断することが大切。
- ・ いろいろなメディアの中から自分で選んで、欲しい情報を得ることが大切だと思う。
- ・ 同じ情報でも、いろんなメディアで確かめることが大切だと思う。

【情報を伝える側】

- ・ 受け取る人が、わかりやすいようにすることが大切だと思う。
- ・ 間違った情報を送っていないかチェックする。
- ・ 送る情報に責任をもつことが大切だと思う。
- ・ くわしく取材をして、わかりやすく正確な情報を知らせることが大切。

「同じ情報でも、様々なメディアから情報を得たり確かめたりする。」や、「情報を受け取る側と伝える側が、それぞれの立場になって考える。」などの考えは、「情報化した社会の様子と国民生活のかかわり」という社会的事象の一側面を、「多面的に考察している」姿としてとらえることができる。

表現活動では、思考活動で考えたことを表現し合った。ここでは、自分の考えを表現できるようにするために、ワークシートに書いた自分の考えを基にして話すように指示した。考えたことをそのまま話すのではなく、考えを書きまとめたものを基にして話すようにすることで、普段、話すことに自信をもつことができない児童も、



図 3-36 考えを表現し合っている様子

考えを最後まではっきりと話す姿が見られた。

思考活動では、これまでの思考活動 表現活動 思考活動 表現活動 を踏まえ、私たちの生活と情報のかかわりについて、自分の考えを書きまとめるようにした。そのために思考活動

では、前掲表 2-2(p.15)の“考え方とその話型”の中から、次のような考え方や話型の文を子どもたちに提示して、自分の考えを書きまとめるようにした。その結果、子どもたちは、以下のように自分の考えをワークシートに書きまとめた。

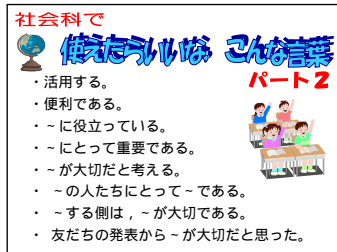


図3-37 考えを書きまとめる際に提示した資料

- ・ 新聞、ラジオ、インターネット、本、ちらしなどのメディアは、知りたいいろいろな情報を得ることができるので、とても便利だと思った。
- ・ メディアには、それぞれ良い点や問題点があることがわかった。これからは、同じ情報をいろいろなメディアで見たいです。
- ・ 情報は、ぼくたちには大切なもので、受け取る人たちにとって欠かせない存在だ。
- ・ 友だちの発表から、どのメディアも一長一短だということがわかった。
- ・ 情報を得たり送ったりするときは、正確さやわかりやすさが大切だと思う。いろいろなメディアは私たちの生活に役立っている。

この実践でも、図 3-37 に示した資料は、情報と私たちの生活とのかかわりについて、自分の考えを書きまとめる上で有効であった。

(2) 個を見つめて

「わたしたちの生活と情報」の実践では、一回目の実践の手だてに加え、以下のような手だてを考えた。

- ・ 集めた付箋紙にタイトルをつけ、それをキーワードにしながらか自分の考えを書くようにすることで、二つ以上の事実から考えることができるようにした。
- ・ 情報を受け取ったり伝えたりする体験をすることで、違う立場になって考えることができるようにした。

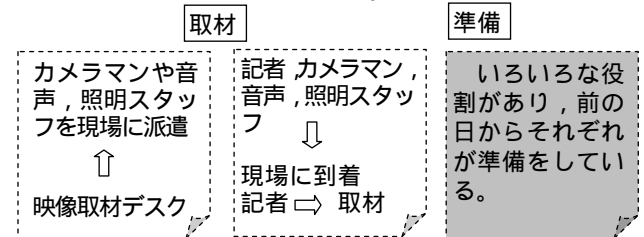
3人の児童に焦点を当て、これらの児童の姿が第2章第1節2項で述べている“多面的に考察する姿”であったかを、以下の視点で分析する。

- ・ 付箋紙の数やノートの記述内容から、二つ以上の事実や方向から考えることができたかを分析する。

A児の姿を通して

「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」という学習問題に対して、A児は、これまでに見たテレビ番組を思い出し、「何人かのアナウンサーが現場にいるから。」「人工衛星からの電波を使っているから。」という予想をした。

そして、“取材の仕方や様子”について調べ、以下のように、調べた事実を付箋紙に書き出し、タイトルをつけた。(塗りつぶしの記述は、実践でのピンク色の付箋紙である。)



付箋紙に書いた調べた事実やそれらにつけたタイトルから、次のような考えをノートに書いた。

テレビのニュースが情報を速く伝えられるのは、前日から取材の準備をしているから。

二つ以上の付箋紙や、付箋紙につけたタイトルを基に自分の考えを書くことができている。しかし、考えた内容である、「前日から取材の準備をしている。」ことが、情報を速く伝えることにどのようにつながっているのか、ということについての記述は見られない。自分の考えを再構成する際に、学習問題と付箋紙の記述とを照らし合わせながら、じっくりと考える時間をとる必要があったと考える。

また、情報を受け取ったり伝えたりする体験を通して、次のような考えを書いていた。

【情報を受け取る側】

- ・ 情報をつたえてもらっている。
- ・ 本当に正しいか、判断する。

【情報を伝える側】

- ・ 正確にわかりやすくするための工夫が大切。

【情報と私たちの生活とのかかわりについて】

- ・ どのメディアも便利だと思った。また、どのメディアも生活の中で役立っている。

情報を受け取る側と伝える側のそれぞれの立場で考えることができていると思われる。また、「どのメディアも便利だと思った。」という記述からは、ワークシートに書き込んだ様々なメディアの良い点の一つ一つを見た上で、情報と私たちの生活とのかかわりを総合的に考えていると思われる。

体験するだけではなく、体験したことを言語化することで、このような姿があったと考えられる。

B児の姿を通して

「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」という学習問題に対して、B児は、最初、自分の考えをもつことができなかった。しかし、友だちの考えを聞くことで、「多くの人が働いているからではないか。」という思いをもった。その後は、自分の予想の下、意欲的に調べる姿が見られた。

たくさんの職員

の職員数は放送関係7508人
技術関係 926人
営業関係 749人
放送関係がいちばん多い。

放送センターでは、24時間交代制で、働いている人の人数は、およそ1000人になります。

役割分担

記者情報を集めている。
取材デスクどれをニュースにするか選び、詳しい取材の指示をする。

役割を分担している。

そして、“働く人や役割”について調べ、右のように、調べた事実を付箋紙に書き出し、タイトルをつけた。

付箋紙に書いた調べた事実やそれらにつけたタイトルから、次のような考えをノートに書いた。

テレビのニュースが情報を速く伝えられるのは、たくさんの人が、役割を分担して働き、いろいろな工夫をしているからです。

二つ以上の付箋紙や、付箋紙につけたタイトルから自分の考えを書くことはできているが、「いろいろな工夫」についての具体的な記述は見られない。「例えば」「具体的には」などの言葉を使って考えを書きまとめることができるような支援をすると、様々な事実から自分で考えることができるようになり、多面的に考察する力が育成できるのではないかと考える。

また、情報を受け取ったり伝えたりする体験を通して、次のような考えを書いた。

【情報を受け取る側】

- ・ 得た情報が正しいか、判断する。
- ・ 同じ情報をいろんなメディアから得る。

【情報を伝える側】

- ・ 読みやすく、正確に情報を伝える。

【情報と私たちの生活とのかかわりについて】

- ・ 「字が小さい。」という問題点が多かった。また、どのメディアも、必ず「良い点」と「問題点」があることがわかった。伝える方は読みやすく、正確にするのが大切だと思います。

最後の記述を見ると、情報を伝える側の立場から考えている方が多いようである。受け取る側とのかかわりについて考えられるような言葉かけや、考える際の視点の提示などが必要であった。

C児の姿を通して

「なぜ、テレビのニュースは情報を速く伝えることができるのだろう」という学習問題に対して、C児は、現場から中継で伝えられるニュースから、「現場に人がいて、そこから伝えているから。」という予想をした。

いろいろな人

職員数の合計は、10,842人
ディレクターやタイムキーパーがいる。

番組を作るのに必要な人数は、10数人
(でも、番組によってちがう。)

役割

プロデューサーの人は、番組全体の責任を負う。

キャスターの仕事は、ニュース番組の進行

取材

テレビ局は、一日も休まず、ニュースを集めている。

中継の前日から現場に行って情報を集めている。

そして、“働く人や役割”について調べ、右のように、調べた事実を付箋紙に書き出し、タイトルをつけた。このように、付箋紙に書いた調べた事実やそれらにつけたタイトルから、次のような考えをノートに書いていた。

テレビのニュースが情報を速く伝えられるのは、いろいろな人が協力をしているから。

付箋紙に調べた事実を書いたり、それらにタイトルをつけたりすることはできている。しかし、タイトルをキーワードにして、調べた事実から総合的に書きまとめることについては不十分であったように思われる。授業の中で、児童の考えをその場でチェックして評価したり、「つまり」「～な事実から～と思った。」などの考え方や、具体的な話し方を個別に提示したりする必要があった。

また、情報を受け取ったり伝えたりする体験を通して、次のような考えを書いた。

【情報を受け取る側】

- ・ 得た情報が正しいか判断する。

【情報を伝える側】

- ・ くわしく、わかりやすくするための工夫をする。

【情報と私たちの生活とのかかわりについて】

- ・ 送る側は、わかりやすく工夫をしないとだめなことがわかりました。本とかちらしは、便利だと思います。理由は、わかりやすいからです。

送る側の立場から考えていると思われる記述が多い。「わかりやすくするための工夫をすることは、受け取る側にとって、どのような良い点があるのだろう。」といった発問をすることで、さらに思考を深めることができたのではないかと考える。

児童の姿から

3人の児童の姿から「わたしたちの生活と情報」の実践において考えた手だてが、多面的に考察するために有効であったかを考える。

二回目の実践においても、単元の構想を工夫する際には、学習指導要領から、学習する内容、調べる事柄とその調べ方、考えさせたい内容を抜き出した。そして、そこからめざす子どもの姿を想定した。実践においての子どもたちの記述や発言を振り返ってみると、「多くの人が役割を分担して仕事をしているから速く伝えることができる。」「いろいろな方法で情報を集めて比べてみるのが大切だ。」など、はじめに設定した子どもの姿と同じような意見や考えが数多く出された。これは、思考活動や表現活動を繰り返し行う場を設定したことや、考え方や話型、まとめ方などのモデルを提示したことにもかかわるが、今回は特に、調べた事実を書き出した付箋紙にタイトルをつけて、それをキーワードにして自分の考えを書いたことや、ワークシートに、聞いた内容を書き込んで考えたことなど、書く活動を充実させたからであると考えられる。子どもたちにとって、考えた内容を文字に書き出して視覚化することは、多様な意見や考えを出し合うことにつながったと考える。

また、違う立場になって考えることができるようにするために、情報を受け取ったり伝えたりする体験をする場を設定したことは、「どんな気持ちで書いたか、その人の気持ちを考えながら読むことが大切だと思う。」「受け取る人が、わかりやすいようにすることが大切だと思う。」という記述からもわかるように、「情報化した社会の様子と国民生活のかかわり」という社会的事象の側面を、一方向ではなく双方向、あるいは二つ以上の方向から考えることができたのではないかと思われる。問題解決的な学習の過程に体験活動を取り入れ、さらに、体験したことを言語化することは、実感を伴って考えることにつながった。

このように、授業実践での子どもたちの姿を通して成果や課題が見えてきた。第4章では、多面的に考察するために、本研究で大切にしたいと考えた手だての成果と課題を分析し、思考力・表現力を育成するためには、どのようなことが大切なのか、授業改善の視点も踏まえ、社会科学習の在り方について述べる。

(60)農林水産省『ジュニア農林水産白書2008』2008.6

(61)前掲(17)pp. 66～69

(62)前掲(16)pp. 46～59

第4章 研究の成果と課題

第1節 研究の視点について

(1)社会科学習における思考・表現活動

本研究では、思考活動と表現活動の二つの活動を充実させることはもちろんのこと、思考・表現思考・表現というように、思考活動と表現活動を連動させながら繰り返し行うことが必要であると考え、それらの活動を授業に取り入れて実践を行った。思考活動と表現活動を繰り返し行うことで、授業の中で子どもたちの姿から、次のような成果があったと考えられる。

それは、子どもたちの考えに深まりが見られたことである。調べた事実から考え、その考えを表現し合うことで、今まで自分の中になかった新たな考えに出会うことができた。授業実践では、友だちの発表から新たに知った事実や考えをピンク色の付箋紙に書き、それと自分が調べた事実とを比べたりつなげたりしながら考えるようにした。その活動を通して考えた内容は、はじめに自分が考えた内容と比べて、明らかに違っていた。たとえば、それが一見して同じ内容であっても、自分の考えと友だちの発表から知った新たな事実や考えと、比べたりつなげたりした末の考えであり、「やはり」「けれども」などの言葉を使って記述していたことから、子どもたちの考えに深まりや変容が見られたと考えることができる。また、表現し合ったことから、新たに知った事実や友だちの考えを書いて、それを基にして考えることで、新たな気づき生まれ、「もしかして～かもしれない。」「多分～していると思う。」などの思いをもつことができた。授業実践を通して、自分の考えを表現し合ったり、交流したりすることは、自分の考えを深めたり広げたりすることに有効な手だてであることが確認できた。

また、思考活動と表現活動を繰り返し行うことで、思考活動と表現活動のそれぞれの活動が活発になったことが挙げられる。考えたことをノートやワークシートの記述を基に表現し、表現し合ったことを基に再び考えることで、考えたり表現したりするための礎ができた。自分の考えを表現することに自信をもつことができなかった児童も、思考活動でノートやワークシートに書いた自分の考えを話す姿が見られた。第2章で、「思考と表現の二つの活動の間には密接な関係がある。」と述べたが、授業実践を通して、そのことを確認するこ

とができた。

また、本研究では、思考活動と表現活動のそれぞれの活動を充実させるため、三つの手だてを考え、授業実践を行った。

まず、思考活動では、調べた事実や友だちの考えを付箋紙に書き出し、その付箋紙の位置を操作したり、タイトルや矢印をつけたりして、思考の過程を視覚化しながら考えるようにした。その結果、次のような成果があったと考えられる。

一つめは、短くまとめる力が身についたことである。実践では、一つの付箋紙に一つの事柄を書くように指示をしたが、はじめは、付箋紙にどれくらいの量を書けばよいのかわからない様子が見られた。しかし、活動を重ねるうちに、短くまとめられるようになり、「今日は、これだけになった。」と付箋紙が増えていくことに喜びを感じていた。付箋紙に書き出すことで、どのような言葉が大切なのかを考えながら、短くまとめる力が身についたと考える。

二つめは、自分の考えを構成することに役立ったことである。色のついた付箋紙に書き出すことで、「調べた事実」と「自分の考え」をはっきりと分けて示すことができた。授業実践では、調べた事実や友だちの考えをそのまま書いたり発表したりしている児童はいなかった。調べた事実や友だちの考えを視覚的にとらえることで、それらの事実から総合的に考えることができたと考える。また、付箋紙にタイトルや矢印をつけることで、調べた事実や友だちの考えを書き出した付箋紙の関係がわかりやすくなった。特に、二回目の実践で、子どもたちは、「テレビ局で働く人たち全員が、役割をもって協力し合っているから。」のように、付箋紙につけたタイトルをキーワードにしながら、自分の考えを書きまとめていた。

このような姿から、付箋紙を活用したことは、子どもたちが考えを構成するために有効な手だてであることが確認できた。

一方で、付箋紙に書き出したことを自分に取り入れながら考えようとするあまり、結果的に自分の考えがまとまりにくくなっている児童の姿が、一部に見られた。問題解決的な学習の過程で、常に自分の考えやその流れが意識できるようなノート作りをすることや、授業の初めに自分の考えを確認したり、終わりに自分の考えを振り返ったりする時間を設定するなどの支援が必要であった。

次に、表現活動では、考え方や表現の仕方のモデルを提示した。その結果、次のような成果があ

ったと考えられる。

一つめは、思考力を育成することにつながったことである。授業実践では、前掲表 2-2(p.15)の“考え方とその話型”の中から言葉や文を提示して、自分の考えを書きまとめるようにした。特に、効果があったと考えられるのは、複数の事実から考えるための、“つまり～だと考える。”工夫をしている。“役立っている。”や、複数の方向や立場から考える“友だちの考えから～だと考えた。”“やはり”“けれども”“さらに”などであった。

自分の考えを書いたり話したりする際に、子どもたちがこれらの言葉や文を使おうとすることで、調べた事実や友だちの考えから、どれが大切で、自分の考えとどのようなかかわりがあるのかを考える姿が見られるようになり、思考がより活発になったと思われる。子どもたちは、付箋紙に書いた内容を振り返り、何度も書いたり消したりしながら書きまとめようとしていた。このように、考え方とその話型を提示することは、表現力を育成するだけでなく、思考力も育成することができる支援になると考える。

二つめは、自信をもって活動することができたことである。考え方とその話型を提示することで、「このように書けばいいんだ。」「このように話せばいいんだ。」というように、子どもたちの中に安心感が広がり、自信をもって活動することができた。“ノートやワークシートに書いた考えを、自信をもって表現することができた”と先に述べたが、それを支えていたのは、このような考え方とその話型の提示であったと考える。

一方で、“考え方とその話型”の活用の仕方については課題が残った。授業実践では、調べた事実からどのようなことがいえるかを総合的に考える活動が多かったため、比較や関連の考え方とその話型を用いて考える場面が少なかった。比較や関連で示している考え方や話型は、付箋紙に書き出した事実を比べて、差異点や共通点を見つけ、そこからどのようなことがいえるかを考える際に、効果的であると考えられる。したがって、普段の授業から、二つ以上の事実を比べて、“同じ点は～である。”“違う点は～である。”などの言葉や文を使いながら考える活動を繰り返し行うことが大切であり、そのような活動を積み重ねることで、社会的事象を比較させたり関連させたりしながら考える力が育っていくのではないかと考える。

さらに、表現活動では、調べた事実をそのまま発表するのではなく、調べた事実から自分の考え

をまとめ、表現することができるようにするために、まとめ方の具体例を提示した。そのことは、まとめる型を身につけることにつながったと考える。まとめる活動をする際に、特に大切にしたいことは、調べた事実を丸写しするだけでなく、必ず自分の考えがまとめの中に入っているということである。そのために、具体例には、自分の考えを書き入れるように示している。どの箇所に説明や見出しを書き、どの箇所に自分の考えを書けばよいのか、基本的な形式さえ理解し、それが定着すれば、具体例がなくても、学習したことを自分でまとめることができると考える。

授業実践では、レポート、新聞、テレビやラジオのニュース原稿、インターネットの掲示板、本、チラシなどのまとめ方の具体例を提示した。はじめは、まとめ方の具体例にしばられ、具体例の通りにまとめようとする姿が見られたが、まとめ方の形式や自分の考えを書き入れるポイントを、まとめ方の具体例を指し示しながら具体的に助言することで、自分なりにまとめる姿が見られるようになった。モデルや具体例を示すことは、“子どもの自由な発想を奪うのでは”ととらえる向きもあるかもしれないが、子どもが自ら考えをまとめ、表現するためには、モデルや具体例といった基となる礎を、必要に応じて提示することが大切であると考える。

(2) 単元構想の工夫がもたらす効果

本研究では、多面的に考察する力をはぐくむためには、問題解決的な学習の過程において、子どもたちから多様な意見や考えが出てくるようにする必要があると考え、単元の構想を工夫した。

そこで、具体的には、学習指導要領から、子どもたちが調べる内容や調べる方法、そして子どもたちに考えさせたい内容を抜き出し、抜き出した内容を基にしてめざす子どもの姿を想定した。そして、単元構想図を作ることで、次のような成果が見られた。

まず、めざす子どもの姿を想定することで、授業の中で、子どもたちからどのような発言や記述があればよいのかといった基準が明確になったことである。このことを通して、指導者は、子どもの発言や記述と、めざす姿を比べ、どのような支援が必要なのかを考えることができた。授業実践では、指導者が、児童のノートを毎回確認し、次の時間にどのような活動をし、どのようなことを考えればよいのかがわかるように、言葉を書き入

れたり、個別に言葉かけをしたりしていた。そうすることで、児童自身が、学習のめあてを明確にもつことになり、意欲的に活動する姿が見られたのである。授業をする際には、当然のことであるが、めざす子どもの姿から、評価の基準や、それを達成するための手だてを考えることが必要であるということをも、再認識することができた。

次に、単元構想図を作ることで、指導者が単元の学習の進め方を具体的にイメージすることができたことである。単元構想図に、思考活動と表現活動を繰り返し行う場面を明確に示すことで、単元のどの場面で考えを深めたり広げたりすればよいのかの見通しをもつことができた。

また、単元構想図を基にして学習を進めることで、子どもたちから多様な意見や考えが出されたが、一回目の実践でのC児の記述にもあるように、一つの学習問題や話し合う視点から、子どもたちは多様に考えていた。それは、単元構想図で活動の流れを示し、そこに発問を明記したり、自分の考えを表現し合う活動を通して、友だちの考えと自分の考えを比べ、自分の考えを振り返ったりしたからだと考える。このようなことから、単元の構想を工夫し、単元構想図を基にして学習を進めたことは、子どもたちが多様に考え、その考えを表現し合うことにつながったと考える。

一方で、単元の構想を工夫する際には、観察や見学や調査など、子どもたちが自分で見たり人に聞いたり、触れ合ったりしながら、社会に生きる人々と直接かかわって学習できるような場を設定する必要があると考える。授業実践では、問題を見出したり調べたりする際に、指導者が提示した資料や、インターネットで検索した資料、教科書や資料集などを使うことが多かった。5年生の学習内容から考えると、それらの資料だけでは、社会的現象と自分とのかかわりを十分に実感することはできないと考える。どの場面で観察や見学や調査などの体験活動を取り入れれば、子どもの思考活動に効果があるのかを考え、適切な場面で体験活動をすることが大切である。そして、体験活動を通して、新たに気づいたことや思ったことを言語化することで、それらを基にして、さらに思考することができると思う。

以上のように、これらの手だてでは、多面的に考察する姿を育成することに一定の効果があったと考えるが、今後、さらに多面的に考察する力を育成するためには、どのような工夫が必要なのかを、次節で述べる。

第2節 多面的に考察する力を育成するために

多面的に考察する力をさらに育成するためには、次のような工夫が必要であると考えられる。

一つめは、つながりやかかわりを視覚化することである。

問題解決的な学習の授業においては、学習問題を解決するための方法や、答えを導き出す過程がそれぞれ異なる場合がある。一人一人が学習問題を追究してきた過程やその答えを出し合いながら、広い視野から学級全体の学習問題を解決できるようにするためには、自分で調べたことや考えたこと、あるいは学級全体で出し合われたことなどを視覚化し、思考の足跡として残しておく必要があると考える。

そのためには、まず、指導者が黒板を使って、わかりやすくまとめる工夫をすることが大切である。例えば、資料や調べた事実や考えなどを並べて比較できるように提示したり、矢印や線を使いながら資料や調べた事実をつなげてまとめたりすることである。また、資料や調べた事実から共通点を黒板にキーワードで示し、そこから総合的に考えられるようにしたりするなど、思考活動を進める上でよりどころとなるように、板書を工夫する必要があると考える。

さらに、必要に応じて、ワークシートを活用し、子どもたちが調べたことや考えたことを、図式化してまとめることができるようにしたい。例えば、ワークシートに調べた事実や考えたことを並べて書き込むことができるようにし、それらを比べたりつなげたりまとめたりしながら自分の考えを導き出せるように、枠の位置や大きさを工夫する必要がある。また、調べた事実と自分の考えや、友だちの考えを分けて書き込めるような場所を線や図形で明確に示したりするなど、考えを構成する過程を視覚的にとらえられるようにするための工夫が必要である。ワークシートにこのような工夫を施し、考えを構成する過程を明らかにすることは、自分で学習したことをノートにまとめる際にも活用できるようになると考える。

このように、個人やグループで調べた事実や考えを視覚化することは、思考の過程を振り返ることができ、それらを基にして、さらに自分の考えを再構成することにつながるはずである。また、調べた事実や考えを視覚化してつなぎ合わせることで、社会的事象を、より広い視野でとらえることができるのではないかと考える。

二つめは、社会とのつながりを、より感じられるような活動の場を設定することである。

本研究では、思考活動と表現活動を繰り返し行う場を設定したが、学級内の活動だけではなく、社会とのつながりを実感することができるようにするための工夫が必要である。これは、新学習指導要領において、「公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成する」⁽⁶³⁾ことが重要視されているように、子どもたちが、よりよい社会の形成に向けて、社会に積極的にかかわっていくことが求められている点と合致する。

具体的には、思考活動と表現活動を繰り返し行った上で、自分自身がこれからの社会に何ができるかを考え、積極的にかかわっていくことができるような表現活動の場の工夫が考えられる。例えば、実際に行われている 市民会議や フォーラムなどをモデルとして、自分の考えを表現し合ったり、考えたことをスローガンや提案にしてまとめて地域に発信したりするなどの工夫が考えられる。自分が考えたことを様々な人に伝え、それらの人々から感想やコメントをもらうことができると、今までになかった考え方や違う視点などを、自分の考えに取り込むことができると考える。

また、学習したことを、ほかの社会的事象に転用させたり応用させたりしながら、さらに実生活に活かしていくために、思考活動と表現活動を繰り返し行った上で、観察・調査・見学活動を取り入れることも考えられる。例えば、“人々の生活は、自然条件と深いかかわりがある”ということ、学習を通して考えることができたならば、その視点をもって、もう一度ほかの事象を観察したり見学したりするのである。そうすることで、考えたことがより確かなものとなり、学習した内容の理解がさらに深まるのである。新たな視点や違った視点で社会を見ることで、より多面的に社会的事象を見たり考えたりする力をはぐくむことができるのである。社会科の学習を通して見据える先は、私たちがくらしている“社会”であり、このような活動の場を設定することで、社会に積極的にかかわっていくことができるようになると考える。

(63)前掲(17)p.3

おわりに

最後に、京都市立六原小学校と京都市立桃山小学校の研究協力員の先生方をはじめ、教職員の皆様に支えられ本研究を進めることができた。この場を借りて感謝の意を表したい。